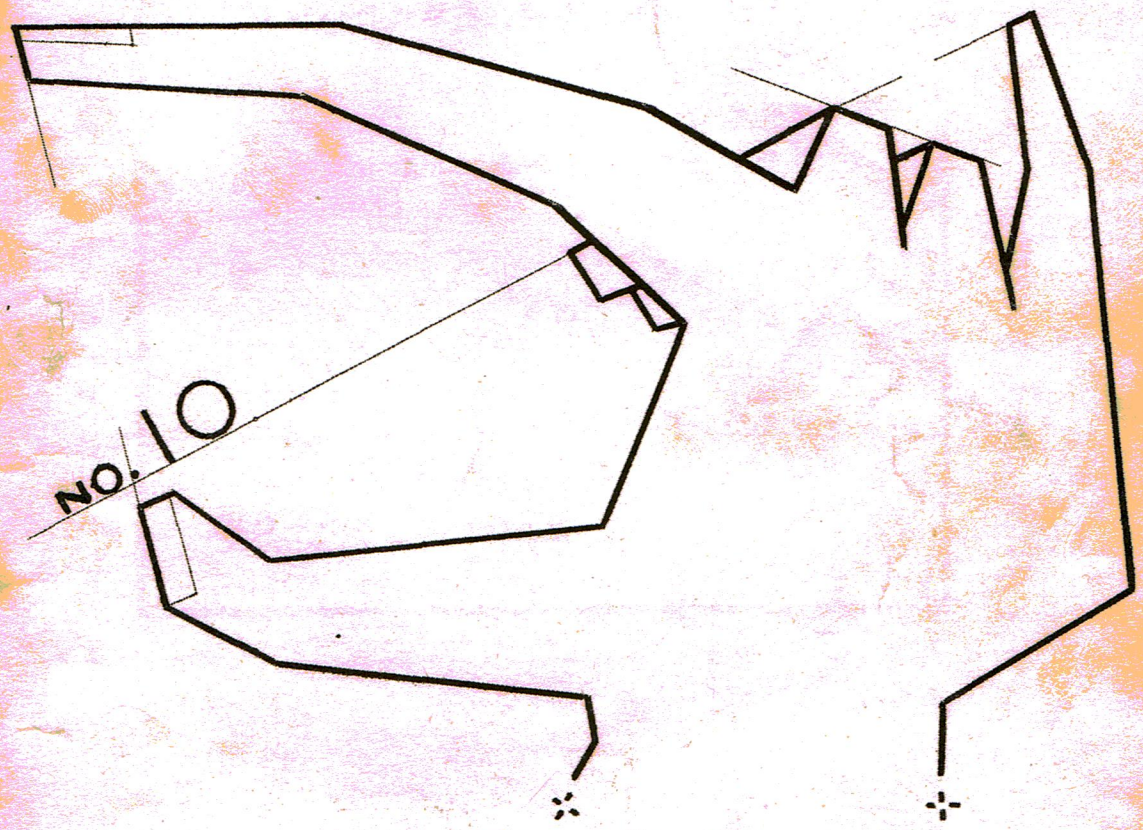
CHAIN



An Organ of Chem. of Fib. Dept. '62 - Feb.

青　年

青年はたたかう
　　苦悩，孤独，虐待，汚辱にたいして。

青年はたたかう
　　自己軽蔑，自己不信にたいして。

青年は欲しない
　　だれからも同情を

青年の象徴（しるし）は抵抗である。

西久保敏規

目　次

世界の繊維化学科に栄あれ	4回生	竹田　敬司	3
或る心境		町田　誠之	7
漢字を無くするのを急ぐ必要はない。	4回生	市村　晃	8
霧	4回生	西久保敏規	12
一金十両	2回生	川嶋　淳夫	13
祭	2回生	松原　博	14
鳴滝の土		相宅　省吾	16
夢物語	3回生	松下真智子	17
我が青春の花	4回生	荒穂　治夫	19
「工繊に入ってからもう四年……」	4回生	山名　貞夫	21
"意義"――このすばらしい畜生野郎！	4回生	早川　和彦	24
雪の日	4回生	名取　和信	25
寮の四年間	4回生	海野　悟	25
わすれられぬ事	4回生	木田　文夫	27
猫の条件と人間の条件	1回生	井上　長三	28
この四年間	4回生	三宅庄代子	31
「上役論」		岩崎　眉麿	32
CHAINに思う	2回生	有松　利雄	33
「化学が嫌いになった時」－卒業を前にして－	4回生	真多　勇夫	35
科学とだいだいと恋人と	3回生	岡田　卓三	36
雑感	4回生	吉井　詢二	38
接線	4回生	荒谷　善夫	40
雑感	4回生	近藤　正昭	41
「停年を前にして」		浜村　保次	42
日曜日	4回生	三辻　勝	43
祇王寺	3回生	原　単	49
「素直な疑問」		林屋　慶三	51
Bushの中で	4回生	江間　賢治	52
「思想・随想・幻想」	2回生	金田　洋二	53
卒業にあたって	4回生	近藤　孝一	58

過去・未来・現在 …… 4回生 江間 賢治 59
昭和36年度卒業生のゆくえ …… 60

一つの運動は他の運動を排除する。愛想よく手を差しだせば，拳骨はなくなってしまう。何かやり始めたがそれを抑えたときの激しく緊張した感情についても同じことである。
社交的な女が，思いがけないお客を迎えるために怒りを中断したからとて，私は決して≪なんたる偽善だ！≫などとは言わぬ。むしろ≪怒りを静めるためのなんというよい療法だろう！≫と言う。 ――平和――

我々繊維化学科生が共通の話し合いの場を持ち，お互いをよく理解し，繊維化学科の発展のために個々のエネルギーを結集するべききっかけをつくること。

世界の繊維化学科に栄あれ

4回生　竹田敬司

緒論：　人生で一番貴重な四年がとうとう過ぎた。精神的苦悩の連続の四年間に日記も9冊になったので今卒業を前にして心安らかにペラペラめくってみた．だまって出てゆくのも後味が悪いからいいたいことをいうことにした。

結論：　思うに大学生活は四回生になって始まった感じがする。

考察：　理想的な大学教育について所感をのべるに登山に例をとれば

まず一回生は山に親しむ低山のワンデリングでこの期間にはまだ高いピークは見えないが大いに山の美しさ楽しさを知る。自分で山のどこが好きか分ってくればしめたもの、一向に好きになれない人は体力があっても　やめること。二回生になれば足のむくまま夏山のピークもふみ沢と歩き縦走をやるがよい。見晴しがよく楽しいがスポーツ登山のダイゴ味はまだ分らない。「高分子化学通論」を通読するようなもんだ．しかしこの期間に山の生活になれ登山の基礎知識を身につける。三回生は苦しい訓練。冬雪のラッセル，氷雪技術のトレニング、ピッケルかついで同じ道を何度も上下して荷揚げする。リーダーの命に服従しとても自分の山登りとは思えないほどしぼられるべきだ。だからはるか上のピークなどみているひまはない。しかし時々キジでも打ちながら頂をみあげて大いにあこがれこファイトをもやすがよい。そしていよいよ四回生、アタックの年だ。自分の計画，自力で一つのピークにいどむのだ。不安も多いがはりあいもある。かつてのように平穏な楽しい山ではない。自分でルートを開拓し一歩後退二歩前進の苦しいばかりのスポーツ登山だ、吹雪にまかれた時、教授のadviceや文献という地図はあっても，それを読み自分の行動を決める判断はすべて自分だ、自分以外にたよるものはない。だからこそ一歩一歩高度がかせげるのをみるのはこの上ない喜びだ。しかしせめて前衛峰でも踏まないことには岳界に対して報告書もかけない、ここが小生の如き体力のない輩にとっては悩みのタネというところか。小生みたいに三回生までのstageをさぼったものは、基礎学力にせよ実験技術にせよあたかも頂上直下の氷壁まで来て、さてどうザイルを結んだものかとあわてるが如しだ。

ところで先に四回生になってはじめて大学生活を味わったといったのは．

残念なことに本学には三回生までの stage がきわめてちよろいということだ。そもそも教養にもならない教養科目（文科系）はやめるがよい。倫理、法学社会学，経済学から英語に至るまで反動反共で一貫していたし，専門にしてもセンイシケンやセンイ化工のようにー見大変役に立ちそうで何のたしにもならないひまつぶしの講義が実に多い．そのくせ真に応用力となるべき数学や物理があまりにも貧弱だ。講義にしても我々新鮮な若者を animate して学問への情熱をもやしてくれるようなものはほとんどなかった．だから我流の山歩きで三年をすごしいきなり3000mの雪山をアタックすることになり，これでは遭難もしようというものだ。こんなことならいっそ四年間卒論にした方が気がきいていてその方が自主的、独創的な学生が育っだろう。とはいええらそうなことをいえたブンザイではない，要するに自分で勉強すればよかったんだ、今となってはただつらつらなげくばかりだ。

一体俺は四年間何をしていたのか。入学したとたん例の「赤旗をふりたければ　出て行け」なる古典的訓示をうけたまわり，カッと来てすぐ出ようと思ったが、よく考えると44500円はらったあとだし、又こういう今どきめずらしい御用大学に好奇心もあったのでともかく教科書を買ったのが運のつき。分析実験でいろんな色をつけたりけしたりしていると少しは大学らしい気もした。一回生は本ばかり読んでいた、Marx, Engels, Lenin などの古典文献を片っぱしから読みとばした。近代数学にも興味をもち出したが何しろあの訓示のおかげで、社会の矛盾に目をつぶり，資本家のモハン的ドレイとなるための「専門の勉強」など出来るか，という反感があって、化学など見向きもしなかった。ともかくも一回生は思想的に実り多い一年ではあった．

二回生は300 Km の徒歩旅行にはじまり，夏は北海道の一人旅と大自然の魅力にすっかりつかれた。未知にあこがれ自分でかせいだ金で足のむくまま自分の足で歩くことに青春の意義と生きがいを見出した分だ．三回生になると指針通りのおもしろくもない実験でいそがしそうになった。そして安保と来た。しかし新聞を出しても厳重なケンエツをうけて言論の自由もないし，学内集会を開こうとすると「そんな目的に学校をかせない」とガンとはねつけられるし全くもうこの「事なかれ大学」にはあいそをつかした。やっと学内にデモ参加ポスターをはれるようになるころは安保は通っていた。もちろんあの斗争が社会主義革命へ発展する条件はなかったけれども，少くとも「集団の暴力」で支配階級をへこませるという前例くらいは作れると思ったが結局完敗に終った。要するになるようにしかならんのか。ガンコな「補導

委」とやらはともかくとして、学生の中にも「プラカードにうちの大学の名を出すのはメイワク千万だ」とかみついてくるものや、デモにゆくものをひま人よばわりするものがいたことは真に心から悲しかった。入学早々、例の訓示をうけたセン大生の最も悲劇的な一面をまざまざと見て、顔で怒って心で笑った。何から何まで学生の自主的活動をさまたげられては自主的に勉強もする気がしない。こんな大学は学問に於いても不毛の地だ、とうらめしく思いつつ、合唱や山歩きをしている内に三回生も終りに近づいた。若い独創性を生かして積極的に活動する機会に欠けていたのと、将来の進路に希望がもてず、神経衰弱の深みにおちこんだ。全く無気力になり、若かりしころの理想主義も情熱もどこへやら、ただもう無力な自分を二月の寒空にさらすのは一分たりともたえられずエンせー色だったが、今から思えばあのころの俺は全く自己ソウ失のドン底にあった。

春風とともに卒論がはじまった、アタック開始だ。ガスにかくれてみえない高い峯を心眼で見た時，すべての雑念は情熱の炎にもえつくされ、どこをどう登るかも分らないくせにはじめて冬山にいどむ感激でいっぱい，大海を前にしたニュートンの心境だ。自分の力で自主的に前進する目標を　　ことはまさにルネッサンス的歓喜だ。「資本主義を否定しながら資本家にやとわれることは矛盾だ」と考え、勉強までこばんでいた偏狭な人生観にも革命がおこり，真に唯物論的な人生観に aufheben 出来た。いやしくも工学士なる名称をいただく以上は何はさておきそれ相当の実力と独創力を有しているべきで、それは社会に対してというより自己に対する責任である．自らパイオニアとなる能力を養なわんとあかんなあと悟った。三日以上先のことに神経をつかわず、前向きの姿勢で「現在に全エナジーを集中する」というのが一貫した方針である。これは山で自ら得た思想だ。自分をせまいスケジュールにおしこむことは自ら個性と独創の芽を殺すことを意味する。

雨上りなどには比良の頭がみえる実験室の住人となり、バトミントンや碁のひまな時には実験もした。とにかく実験とは思うようにいかんもんで，実験方法が確かになるまでほぼ一年かかった、つまりだな，データをしぼり出すのはこれからなんだ。徹夜で実験のウシミツ時、やっと仕事を終えてシュラフに入ってーブクすう、ただ水道のもれる音ばかり、こんな時には自分が「研究に没頭している研究者」に思えて来て自己満足にひたりつつねてしまうが、朝データを整理してみると、きまって失敗だ、それも化学以前の失敗ばかりだ，こんなことをもう何回もくりかえして来た。しかし　研究という

ものは山登りをほとんど同じほどおもしろいものだ。今じゃ我が「世界のC科」に絶大な誇りを感じている。オー，ただみたいな授業料で、高い薬品をバリバリ水に流しても小言一ついわれないのだから文句をいうとバチがあたるというものだ。日記にはところどころポッカリ空白がある、曰く，「奥美濃新緑の旅」「黒部源流イワナツリ」「白山へ長源地探険」「紅いもゆる新雪の白馬へ」「中ア冬山訓練」等々、すべて山ですごした思い出深い日々だ。そしてこのブランクこそ四年間でもっとも生き生きとした部分だ。四回生に山ですごした日数は延べ 50日にもなる。山へ行くたびに希望にもえてハツラツとして帰って来る、勉強も実験もさあやるぞ!と意気盛んだが、帰って疲れがとれるころはもうすっかり元のままだ。実験もどこまでやったか思い出すのが一苦労だ。しかしこの非建設的な山登りが実は偉大なエネルギー源だ、実さい、あの人里遠く離れた無人の白山頂上、岩の雨水が今雲海のかなたからのぼったばかりの太陽にきらめくさえきった気魄にみちた天上の大気を吸えば、まさに身も魂もけがれは消える思いだ。長い放浪のはて、深い谷底の出湯に首までしずめて目をみる時はゴクラクに遊ぶ心地がする。-20°Cの風雪のテントに何日も沈潜していると、大自然のきびしさが感動さえよびおこす。

卒業後も自然科学の登山を一生やるつもりである。同じ登るなら，体力のない小生としてはおはずかしいがやはり未踏峰をアタックしてみようかと思うのも山を志す者としてはごく自然な感情だからまんざらはずかしいとも思わない。幸い科学の世界には未踏峰は無限にある。いやまだ存在さえ知られていない山が雪にうずもれて探険を待っている。願わくば山へのこのかぎりないあこがれが死ぬまでつづかんことを。

ああ　見よ今日も又　壁にぶらさがったピッケルが大あくびせしを.

或る心境

町田誠之

化学の研究に実験は必ず要するものである。研究はもちろん，論理的に正しいことは必要ではあるが，これが実証されなければ科学としての理論とはならない、実験は化学の生命である。実験を行うには誠実と忍耐とが必要である。

誠実な心を以て実験をすることは極めて大切なことで、得られた測定値は素直に受取らねばならない．予め結果を予定して実験したり，結果を自分の都合のよいように曲げて解釈することはゆるされない。

忍耐も実験する人には強く求められることである。どんな困難なことに出逢っても実験をやりぬく工夫が大切である。しかし，多くの場合に、忍耐というのも他から見てのことであって，研究者当人にはそれほど苦しいことと感じられていない場合も多い．熱心に仕事をすれば興味が自然と湧いてくるもので、興味が出ればまた自然に熱心になるものでもある。

そして研究実験が成功した時の喜びは、困難が多かった時には一層大きいものである。この喜びは、真面目な研究者のみが得られる純粋な人生の楽しみの一つであり、科学研究者の特権である。

ところで，人生の経験というものを考えてみると，実験と異る所がある。それは二度とくり返すことができない点である。科学の実験は、同じ自然現象を何回となくくり返して起させてそれを観察することである。人生の経験は、時には同じような経験をしたと感ずる場合はあってもそれは環境や条件が異っていて、全く同一とは言えない．人生は成功しても，失敗しても，再びもとの出発点に返ってからやり直すことができない。

われわれは人間として，誠実な心を以て，着実な態度で人生を歩まなければならない。そしてこの人生の貴重な経験を正しく受取り，楽しい人生を進み度いものと思う。

漢字を無くすのを急ぐ必要はない

4回生　市　村　晃

本誌第7号に，本科にしては極めて異質な稿を載せて頂いたところ，直接に，あるいは，本誌を通じて忠告や批判を寄せて頂き大変ありがたく思っている。私の変らない信条の一つは，常に習慣や常識を批判して日々の生活がマンネリズムに陥らないようにすることであるが，その具体策の一つとして日頃，頭にあった漢字廃止を実行してから1年たった。「漢字は，あるが故に全く無反省に使われなければならない。そのために固い表現をした印刷物に目が向きにくくなるし，文章をかくのが面倒になる。もし漢字がなくて，仮名文字だけしかないのなら，誰でも本を読んだり書いたりするのが好きになるのではないか。」と思って秘かに仮名書きの練習を始めた。第7号に一部載せたように色々とむつかしい問題があったが，今では，その後改良も加えて，仮名書きもスムースになり，それも読み易くなり，慣れれば何でもないことが分ってきた。しかし，これは自分の書いたものを後で読み直すから，当然読み易いわけだ。他人の書いたものを読まされたら，こうはいかないかもしれない。今直ちに漢字を全部なくすことは，勿論できない。そんなことをしたら日本中大混乱に陥るであろう。そこで名取君の御指摘になるように，自分だけのノートやメモに，あるいは，速記を要する時にだけ仮名書きにすればよいし，もっと速記したいのなら，正式に速記術を覚えればよいという意見も出てくる。もっともなことで，何も他人に力ナ書きを強制したり，公文書を力ナ書きにするのを急ぐ必要はないだろう。そんなことをしなくとも，外国語がどんどん力ナ書きとして日本語に入って来て，自然にむつかしい漢字，漢語は少なくなりつつある。奥歯にものがはさまったような遠まわしの表現から単刀直入の言い方が好まれるようになってきている。今の高校生は，我々よりもずっと漢字を知らないし，又知らないことを恥ずかしがりもしない。その点我々よりも進んだ考えを持っているように思えて，頼もしい限りである。しかし「カンジをなくそう」の稿に対して最も共通していた批判は，字面に慣れていないために読みにくいということであった。そのために途中でおっぽり出されたり，意味のとり違えがあったりしては筆者としても残念である。だから以後のchain誌の投稿は，普通の漢字・カナ混り文に改めた。事実，有松君の言われるように，言葉は目的でなく手段であっ

て文意の理解に害する言葉や表記法は、用いるべきでないのである。

ここに論壇の立かせ屋と異名をとる福田恆存という人がいる。この人，実は昨年中、国語界を騒乱の中に落し入れた張本人，新聞・雑誌・ラジオ，果てはテレビにおいてさえ，漢字～カナ論争が繰り広げられ、未だに何らはっきりした結論が出ていない。（結論を急ぐ必要はないが）カタヤ表意主義派，コナタ表音主義派，まさに観念論と唯物論の対立である。がっぷり組んだ四つ相撲で表音主義派がじりじりと押しているが、表意主義派もぐっとこらえている。遂に昨年3月，国語審議会委員5名の脱退という大荒れの後、水が入って文6期国語審議会の新委員48名が候補に上げられると、時枝誠記，宇野精一，井上靖の3人は，それを辞退，結局45名が正式に新委員に決められたのが昨年の9月27日である。この国語審議会は、文部大臣への建議機関であるだけにその発言が直接国民に大きくものを言ってくる。以後これらの人々がどんな活躍をしつつあるかが見ものだからその顔ぶれを紹介しておく。

愛川　重義（読売新聞論説委員副主事）
◎阿部真之助（日本放送協会会長）
有光　次郎（吾妻製鋼所会長）
○池田　潔（慶応義塾大学教授）
石井　庄司（東京教育大学教授）
井深　大（ソニー社長）
岩下富　蔵（都立日比谷高校長）
梅棹　忠夫（大阪市立大学助教授）
浦上　五六（毎日新聞編集局長）
梶井　剛（科学技術会議々員）
金子　武蔵（東京大学教授）
金田一春彦（東京外国語大学教授）
久保田万太郎（日本芸術員会員）
熊沢　竜（東京教育大学教授）
桑原　武夫（京都大学教授）
古賀　逸策（国際連々参与）
相良　守峯（慶応義塾大学教授）
佐藤喜代治（東北大学教授）
白石　嵩（朝日新聞論説顧問）
鈴木　虎秋（東京白金小学校長）
平良　恵昭（東京松濤中学校長）
高木　貞二（東京女子大学長）
高辻　正己（内閣法制局次長）
滝川　幸辰（京都大学名誉教授）
千種　達夫（東京高等裁判所判事）
司　忠（丸善社長）
寺西　五郎（共同通信編集局長）
藤堂　明保（東京大学助教授）
中川善之助（学習院大学教授）
中田　祝夫（東京教育大学教授）
西尾　実（法政大学名誉教授）
西原　慶一（日本女子大学講師）
丹羽　文雄（日本文芸家協会理事長）
波多野勤子（著述業）
浜田　玄介（日本児童文芸家協会理事長）
細川　隆元（評論家）
堀越　禎三（経団連常任理事）
松下　正寿（立教大学長）
村上　俊亮（東京学芸大学長）
森戸　辰男（広島大学総長）
諸井　貫一（秩父セメント社長）
八木　秀次（日本学士院会員）

安川才五郎（日本原子力発電社長）　吉田　富三（東京大学教授）
横田　　実（日本新聞協会事務局長）
◎は会長，○は副会長

さて，この福田さんは、昨年の6月に新潮文庫から「私の国語教室」という本を出しておられる。日本語を愛する人なら一度読んで見給え。その序で，彼はこう言っている。「言葉は誰にとっても身近にあるものです。言葉は自分の外にあって，しかも自分の内にある。自分の肉体と同様に，自分の意のままに操れるものであり、しかもどうにもならぬものであります。」こう言いながらも，彼は言葉を音の形に戻そうとしているのだが，その論旨を引き抜くと次のようになる。

1. 論理的にまちがいだらけの現代仮名遣いを廃して，論理的に正しい，発音に融通の効く歴史的仮名遣に戻すべきである。
2. 比較言語学上，主要語いは、3000，派生語を含めて7000というのが，大体相場の決った数だそうで，当用漢字は最低3000位は必要である。
3. 教育のための言葉ではなく，言葉を教えるのが教育である。
4. 言葉は，その意味に従がうべきで，この意味で表意主義をとる。表音主義では、言葉の時間による変化が大きすぎて言葉が乱れてくる。言葉には規制性というものがある。
5. 漢字の存在理由
   1) 方言の克服
   2) 造語力，名詞（抽象名詞）をつくる能力が大きい。
   3) 語勢が強く簡潔である。
   4) 文章全体を読み易く，早く目に訴える。
   5) 仮名書きのみに頼ると，論旨が曖昧になり文章が冗長になる。
6. 今までの国語の教育法は誤っていた。国語では語法と言葉の意味とを教えたらよいので，何も文学の観賞を主にするべきものではない。
7. 日本語の子音は，英語の子音ほど発音において大きな比重を占めていないから，日本語のローマ字化は適当でない。
8. 「ハ」行音は，極めてあいまいな〔h〕音で，それ故〔wa〕とも，又〔o:〕とも発音できる可能性を残していた。それを現代仮名遣いでは、はっきり〔wa〕は〔わ〕に，〔ha〕は，〔は〕を用いてしまった。然るに「何々は」の〔wa〕には、〔は〕を用いている。〔は〕〔へ〕〔を〕は，/字/音，/音/字の表音主義に立つ現代仮名遣いの大きな例外である。何を根拠にこのまゝの形で残しているのかと言えば，その助詞の性格から，すなわち，意味の故からこのま

まで置いている。表意主義を入れているのは矛盾も甚だしい。

9、長音，拗音，拗長音の表記法の論拠が乏しい。「大きな」が「おおきな」であって，どうして「おうきな」でも「おーきな」でもないのか。又「こうして」は，どうして「こおして」でも「こーして」でもないのか。これは，旧仮名遣で，「おおきな」は，「おほきな」，「こうして」は，「かふして」であって，それをそのまゝ「は」行の音を「ア」行の音に移し変えただけで，これでは新仮名遣を完全にマスターするには，先ず旧仮名遣を知らなければならないという矛盾が生じる。

10、旧仮名遣の文章でも，そう読みにくくないのは，意味が伝われば，読みの方は，それについていくから，大して抵抗もなく正しく読める。しかしいくら正しく発音できても，意味が伝わらなければ，論語読みの論語知らずになる。仮名書きばかりに頼ると，そういう結果を引き起す。

書き出したらキリがないが，まあざっとこういう考えをもっておられる。一々もっともなんだが，それだから何も旧仮名遣に戻したり漢字を増やしたりするというすねに反動的な態度をとらずに，もっと新しい書法を考えだすべきだろうと思う。結局，言葉には，意と音という2つの側面があって，どちらも否定することはできない。音だけでは，意味が通じないし，意だけでは，耳に訴えるという早い意味の伝達ができない。

学習ずけの面から見ても，言葉を音に出してみて，いわゆる口に覚えさせるから意味の理解が容易になる。だから本を黙読していても，口に出して朗読はしていないが，頭の中では，はっきりと発音しながら読んでいる。この意味においても，世界連邦の達成を待たずとも，音声タイプライターが完成すれば，言葉の表記法には，発音記号が最も適しているのではないだろうか。

本誌9号の有松君のデータを極めて面白く見せていただいた。非常によく調べておられて感心した。恐らく相当の時間と労力をかけておられることだろう。私の「カンジをなくそう」の稿に対して疑問に思われた数字を検討してみると，誤であることが分った。この点おわびし，次のように訂正する。

29ページ	3 行目	3109 → 2932
	6, 8	8536 → 8359
	9, 17, 20, 21, 23, 24	0.702 → 0.688
	17, 20,	0.537 → 0.525
	23, 24	0.583 → 0.525

又，漢字の平均字画数は，動的に扱かわねばならないとし，実際に出しておられるのを見ると，「吾輩は猫である」が9.22と一番大きく，小学校6年の

國語教科書が一番少なく，276で，その他のものが8台であるのは，非常に面白く貴重なデータだと思う。以後の健斗を祈る。

結局，我々國語問題に素人の者は，どうすべきか。字画数の多い，あるいは，見慣れない漢字を読めないことや書けないことを恥ずかしがる必要はなく，むしろそれを読まそうとか書かそうとすることを恥ずべきである。そんなことに関心を持たないで，意味のよく通った，思想に矛盾のない文章を書くべきであろう。

'62. 1. 21

Chain No.9 の「アナロジー」の稿の誤を正します。

		誤	正
P.28	15行目	おかしな	むかしは
	19	近づく	近ずく
	21	ヘーシング	ヘーシング
P.29	5	ジャズの	ジャズ。
	14	連絡	電話
	18	狐独	孤独

4行目と5行目，8行目と9行目，21行目と22行目の間は，それぞれ文章が切れずに続いている。

═霧═

4回生　西久保敏規

深い霧が私達をつつむ
　霧が，霧の底から鳴ってくる
足もとから霧が流れる
　首筋へ冷たく触れる
山路に霧が流れる
　肩をよせあって歩く

　よりそって吐息をもらす.

一金十両

2回生　川　嶋　淳　夫

一金十両

右馬代，くすかくさぬか、こりやどうじや。

くすというならそれでよし

くさぬというなら俺が行く

ゆくにつけてはただではおかぬ

力メ(人名)が腕には骨がある。

これは名文である。簡潔にして，用をなしスゴ味がある。

これは兼　が書いたのでもなければ長明が書いたのでもない。

現代風にいうと白タクの運チヤンが開き直ったか，チンピラの脅迫文だ。

日本海軍華やかなりし頃の話である。朝鮮に鎮南浦という港がある

ある士官、〝鎮　ッタ佐世(佐世保)に来い〟と電報をうった。

これには深い意味がありユーモアがある。

名文を書こうと思ったところでたやすく書けるものでない。売文で飯を食う訳でないからそれもよかろう。しかし友より心情あふれた名文を受取るのも又楽しいものである，無味乾燥なレポートしか書けぬのも又おもしろくない

さてどうするかとなるとトレーニングとなるのかもしれない。

まず書いてみることである。多情多感な心情を筆のすさびに。

昔は遊女ふぜいで歌もよんだ。ましてや優秀なる諸君のことだ

我々は現在精神的自己形成期でもある。事にのぞんで必ずしも無感動ではありえまい。結果は内省のよすがともなりうる。

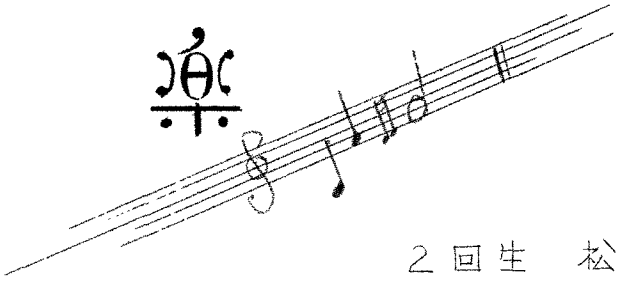
そこでその一つの方法として次のことを提案してみたいと思う。

朝日ジャーナル又はサンデー毎日程度の週間誌を買っていつも余白に記事に対する自己の反応を記していくことである。内容がバラエティに富んでいるし創造でなく反応だから比較的簡単で楽しくもある。

しかし余り力(りき)まない方が良い。平直に述べるところに上記の名文もたまにはあらわれようというものだ。

もう一つ。たまには〝チエイン〟の記事も書いてもらいたい。大げさにいうと金井に何か書けと脅迫された。今まで余りチエインにはたいしたことが

書いてあったことがない。安心してもらって結構，御愛嬌に次号から続々と投稿してもらいたい。それでこそ親ボクを深めるための雑誌として“チエイン”は意義あると思うんだが、（それ以外に何もないからな実際）



2回生　松　原　　博

「演奏する喜びがいかに大きいものであるかは，私が下手なフルートをこりずに吹き続けているのでわかると思います。私は演奏する喜びをすでに小学生の頃から知っています、というとずい分音楽教育を小さい頃から受けたように思われるかも知れませんがそうではありません，リズムバンドで小太鼓をたたいたのです。そしてそれが私の音楽を知ったきっかけなのです。
中学生となってブラスバンドに入りトランペットを2年間，クラリネットを1年間吹きました。この頃に練習をすることだけが演奏技術を高めるのだと思ってほとんど毎日放課後に夏休みも冬休みも毎日練習しました、そしてその練習は私にとっては決してつらくはありませんでした。別に音楽学校にいる訳ではないので、競争心と言うものはなく，（それだけ進歩するのがおそいかも知れませんが……）ただ練習すること自体に喜びを見い出していたのです。高校に入ってすぐに先輩の使っていたフルートを借りてフルートを始めました。始めた頃私より2年上に今は専門のフルーティストになっている人が在校していて私に基礎的な事を二三教えてくれました。そして約4年間、私はそれを基礎として独学でフルートを練習しました。一昨年の十二月から私はフルートの先生の所へ行くようになりましたが私の4年間の練習は全く全く自分だけでしたのにもかかわらずその出発点にあたる基礎的なことを習っていたおかげで決してまちがってはいませんでした。私はフルートを吹くという技術的なことと同時に音楽を演奏すると言うことを重視しています。勿論一つの音楽を表現するためには多くの技術が必要なのですが，技術だけの練習を続けても音楽を表現する喜びを感じなければ音楽は生きて来ないと思います。私は皆さんも御存知のようにきわめて気が弱いので人の前で演奏

するときにどうしてもきいている人を意識してしまうのです。若し私がきいている人を意識せずに練習の時と同じような喜びに自分をまかしきることができればいいのにと思います、私はフルートを始めてから今にいたるまで少しでもうまくなるように，少しでも音楽を表現できるようにと，たえず考えてきました。

C科の今の学生の中で日仏会館でした第1回定演をきかれた人は少ないと思うが、今年の第4回定演の方は幾らかきかれた人があると思う。

「50円も取りやがってひどい音をきかせたなあ」なんて思っている人があると思うのだがそういう人達には今ここで素直に「どうもすみませんでした」と言おう。実際、寒い中をわざわざ電車代，バス代を払いおまけに入場料まで払ってききに来てもらっているのに…… と思うと申し訳けなくなってくる。しかし聴いてもらうという意味では確かに申し訳けない結果であったかも知れないが我々のオーケストラの部員にとって、（少くとも私にとって）先日の演奏会は有意義なものであった。我々はアマチュアであって音楽を本業としていない。言いかえれば音楽を本業としてやって行くだけの才能を持っていないことを自覚している。技術的にメンバーの一人一人を見れば又合奏の技術と言う点でオーケストラ全体を見ても幼稚なものであることは否めないそれなら何故演奏会を開いて聴衆の前であえて演奏するのかと言うことが問題になって来る，ことわっておくが我々はやむをえず入場料のようなものを取ったと言うことである。即ち利益を得ることを目的として入場料を取ったのではないのである。

演奏会をする目的は何かと言うことになる。演奏会をするために各自出来るだけの努力をして技術の向上をはかる。演奏会をすることが我々に技術をみがくことを強要するのである。その結果大なり小なり技術向上と言うことが演奏会の後に残るのである。我々は平素から各自演奏の技術が向上することを望んでいる。従って技術向上の為に演奏会を開くことが先ず上げられる。我々のオーケストラの演奏を聞きに来る人達は何も私達の演奏をきく義務はないのだ。だが私達はできるだけ多くの人にきいてもらいたい。そしてきいてもらうために，少しでもよい演奏を目指しているのである。

鳴滝の土

相宅省吾

五六年前"CHAIN"の前身「あたご」が出されている時，学校周辺と言う題で此の附近の紹介をしていた。それから歳月がたつにつれて我々の歩く場所を良く且つ詳細にわたる様になった。そうして年も取って来たせいかあまり興味を引かなかった歴史的な事迄自然と教えられる様になった。それにしても此の四五年の移り変りは甚しい。我々の散歩の節用であった「衣笠山麓の北山杉がすくすくとのび，萩の花こぼれ無縁仏の倒れたままに捨てられていた」鹿園には高速道路が通り、観光バスが引きもきらず最早我々の足の向う所ではなくなった。これ故我々のしばしば迷い込む所は御室仁和寺の西の丘陵の叢林地帯である。此所にはまだ人に知られぬ小池があり、冬になれば野鴨の遊ぶのが見られ谷の向いは人に知られぬ花寺がひっそりと立ち、渓流は静かな音を立てている。

この瀧の音に昔の人々は歌心を覚えたのが此の地を鳴瀧と言い，幾多の歌が詠まれくいる。

暫しこそ人目つゝみに塞かれけれ果は涙や鳴瀧の川

（西行法師・山家集）恋歌

ある冬の日私は落葉した明るい林の丘を下りて来た。こうしていつもの事ながら古い墓地の中に出た。此の片隅に古い窯の跡を見出した。あゝこれが有名な尾形乾山の鳴滝の窯跡なのかと世界に誇る尾形光琳・乾山兄弟のあの美しい陶器が此の窯で焼かれたのかと、暖い冬の日を浴びながら墓石に腰を下してあの幾多の名作ケンランたる龍田川の皿の紅葉色や，椿の茶碗の花の色を思出していた。去るにしのびず名作を入れて焼いた容器の破片（美しい古信楽（しがらき））や窯の壁片を拾って帰って来た。

此の辺の丘陵地帯は地質的には美しい秩父古生層の上に細い粘土が沖積して出来た緻密な水成岩より成っている。雨に洗われて露出した道々は鮮やかな赤い色の線が美しい模様を画いて表われている。この水成岩の良い部分は所謂真砂（まさご）と言われ此の鳴滝の山で取れるのが最高級品となり古くから刀剣や剃刀に使用されていたのである。今でも所々で採掘された破片を持ち帰って我々は小刀などをといでいる。

寛政十二年刊行の山海名産図会にも"嵯峨辺の鳴滝高尾に産する砥石は天

下広也類鮮し”とあり中世以来本阿弥家の用いたのは専ら此の鳴滝の砥石であった。

最近読んだ本で、高村光太郎の「智恵子抄その後」と言う詩文集に，信親と鳴滝と言う所がある。これを引用すると”古来合砥は京都の鳴滝産が一番よい。合砥と言うのは仕上砥と言うので、これが（木彫用のノミや小刀）の切味を決定するから昔から砥石ではそれを一番大切にする。合砥は全国所々に出るがどうも鳴滝産に及ぶものはない”

此の様にして高村光太郎は信親の小刀と鳴滝の砥石を持って空襲にすべてを失ってもこれだけは肌身離さず持ち歩き北東の山村に自炊しながら詩を書き、智恵子の面影を刻んでいて，これが十和田湖畔の像となっているのかも知れない。

此の様に鳴滝の土で育くまれた名品の数々を思うにつけても，同じ都の※西北の地から育って行く今年の卒業生に幸多からん事を祈る。

※乾山とは都の西北、即ちいぬの地にある山という意．

夢物語

3回生　松下真智子

美しいロマンチックなお話ではありません。私のお話しようと思うのは私の実際に夢みた悲しい残酷な物語です。

明け方近く、それは寒い冬のある日のこと、ある友達が山にでも登ろうかとさそいにやって来ました。一緒に出かけた筈なのにいつか一人になっていました。暗いけわしい頂にかかっていました。ディズニーランドに見られる様な悪魔の国に来ていました。見たことのある人々が悪魔となって、私をおびやかし始めました。ほんとの悪魔でなく，私をからかうかの様に。いじめてやろうとでも言うように。

いつのまにか、深い沼のふちに生まれて1ヶ月位のかわいゝ赤ン坊をだいて1人の小さな子供を連れて途方にくれて立っておりました。

それは兄の子供でした。

その世界には、或る日に生まれた子供は捨てなければならないという、きつい定めがありました。私はその赤ン坊を捨てるために来ていたのでした。よく見れば、沼のずっと底の方に小さく沢山の赤ン坊が，浮いています。はるかかなたなのにはっきりと見えるんです。沢山の人が赤ン

坊を捨てに来ています。みんな悲しげに、自分のだいている赤ン坊と、深い沼に浮ぶ赤ン坊に目をうつしてはためらっています。私のだいている赤ン坊は無心に眠っています。今のうちにそっとすててしまえばと、思うんですがなかなかすてられません。そこは何かおごそかな、ちょうど私が中学生の頃でした。私のいとこが白血病で亡くなり、母と四日市までお葬式にいったときのことです。私より一つ年上の弥生ちゃんの死顔に接したときのあの神聖な、美しい、何ともいえないあどけないあの雰囲気がそこにはありました。無心の赤ン坊を見ているといよいよ捨てられなくなってきます。そこへ二人の夫婦がやってきました。赤ン坊をつれて。その人々はひじょうに無雑作に赤ン坊にいろんな品物をつけて底なし沼に放ちました。〝どうして　そんなに容易にすてられるのですか〟とまよっている私は聞きました。その人々は言いました。運命だから仕方がないと。あの底なし沼の中でも運のある子供は長く生きながらえてそれ、あそこに、あのように泳いでいるではないかと。なるほど、相当に大きくなった子供も無心に泳いでいました。そんにすくいを見出したのか、又何か定められたおきてにあきらめがついたのか、いつか私はすてる方法を考えておりました。下までおりていってそっと水に浮べてこようかと。でもそれはできませんでした。そこまでいってもやっぱりあきらめられないだろうと、連れている女の子にお菓子や、いろんなものを買いにやりました。あちらでもこちらでも捨てています。

悲しみの中に。赤ン坊を見ると目をあげて私を見つめています。また眠り始めました。やがて子供が帰ってきました。大きな袋をもって、思いきって放ちました。もう沼の方は見られませんでした。たゞ手をあわせて、一心に何かに祈り始めていました。一生懸命に手をあわせて。

そこで目覚めたのです。日曜の朝の八時半でした。飛びおきて、たゞむやみに雨戸を開けました。まだ夢の中にいる様でした。

言いがたい　さびしさと悲しみが残りました。赤ン坊をすてっいなかったらせめてものなぐさめになったのにと思いました。人間のエゴ、自分のエゴをつよく感じさせられなさけなくなりました。夢です。しかしこれは何か今の私のなやみを出している様でもありました。でもこれは何を意味するものかわかりません。どなたか、夢の占いをなさる方があれば　どうぞお教え下さい。

我が青春の花

4回生　荒　瀬　治　夫

「この四年間，君は何を得たか？」
この質問の答は難しい。たやすく答えられる様な内容の質問ではない。
最も適切な答を出すのに時間がかゝる，私は後まわしにせざるを得ない。

「この四年間，君は何をしたか？」
こちらの方が易く答が出て来そうだ。やったことをあげれば良い。
先ず実験（この場合多少の差は問わない），それから，テニス，麻雀，碁，アルコール，喫煙，自治会，チエイン　デイト……あげればきりがない程である。この大学四年間こそ，我が青春の花であった（この大時代的表現に笑わないで欲しい）。我が最もエネルギッシュな時代であった。これを読む後輩諸君も，我が同窓の諸君も必ずや，そう思われるに違いない。
人間の未完成から完成へと近ずいていく過程が最も美しい。完成された美は他を排斥し他をつき放す。決して心がそれになじんでいかない。
大学四年間も亦，人間の未完成な姿が完成へと近ずいていく道程の四年間である故にそこに青春の花と言わしめるゆえんがある。決して完成を見せかける必要はない，その未完成を堂々と誇示できる。一歩社会にでたらもう駄目であろうが。
京都の町の散策も心に落ちつきを与えてくれた様だ，どこを歩いてもいつも雨上りの静けさを感じさせた。ガサガサとあわたゞしくて，やたらに坂の多い神戸の街を較べてみると，その良さがはっきりする様だ。私は特に並木の美しい静かな烏丸通りが好きだ。烏丸通りは，道のつきるまで歩きたい気を起こさせる。

再び「この四年間，君は何を得たか？」
つらつら考えてみるに何を得たのだろうか，学問の方から考えてみる。
もともと，「まあ，化学でもえゝな」と思って入ってきたのであるから，はっきりした様な目標は何もなかった。強いてあげるならば，化学的態度といおうか，化学に対してある程度の自信がついたと言うことはできる。

即ち、以前よりは全ての現象を化学のめがねをかけて見る様になったらしいということである。以前は「俺なんか化学者としてものになるのだろうか、我々方向誤てり」と思っていたのが「これはひょっとすると、俺も化学者の一人として何とかやっていけるかも知れん」と思う様になった。
としてみると、私もこの繊維化学科の中に四年間居て、案定，飼育されたと思う。いやでも応でも，こうなっちまったという感じがせぬこともない。
今思えば、もうちょっと基礎的な学問もやっておけば良かったと思うが、事実は，厳としてそうでなかったのだから，これで押し通すより仕方がない。どうも必要に迫られなくては手がつかぬ性分らしい。

「君は、後輩に何を言いたいか？」
別に事の核心に触れることは何も言える柄じゃない。
まあ言うならば、つまらんだろうが聞いてくれ。
学校以外、それもどうしてもせねばならぬ受講、実験、の他はなるべく化学と関係のないことをやったら決して後悔しないと思う。
私も一・二回生の頃、寮にいて自分の大学受験時代の猛勉強の反動か知らぬが，その放らつな生活振りに〝今夜こそは電子論の本を20ページ位読むんだ」なんて良く悪あがきをしたものだが、あれはまだ生活の仕方を知らなんだと思う。環境が大きく変っているのに、前の環境下での生活態度を持ち込もうとする程、莫迦げたことはないと悟った。それ以後の私の生活は快適だった。

「君は、学生時代の恋愛についてどう思うか？」
出来れば止めておいた方が良い。それがまじめなものならば。
適当に女の子と遊ぶのなら良い。将来のため、女性の心情の少しは知っておく必要があるだろう。もし結婚をめざす様なまじめな恋愛をしたならば、それが可能な条件のもとにある時のみ、学生時代の恋愛は陽の目を見る。
ところが学生には、余りにも不可能が多いのじゃないか、こと恋愛にかけては。消極的な意見だが、学生にとって恋愛はあくまで第二次的なものにしかなり得ないのかも知れない。

『工繊に入ってからしう四年』

4回生　山　名　貞　夫

後輩諸君に何か一言ということであるが別に偉そうなことをいえる分在でもないので以下ちょいと卒業に当って僕の感想を述べてみる。後輩諸君に何か御参考になれば幸と思う。

○卒業論文

卒論実験をしてみて始めて大学生活が充実したように思える。そして閉め切りを間近にひかえた今この卒論を通して大学生活4年間の意義らしきものをちょっぴり感じる。卒論実験そのものについて僕は「ポリプロの染色」がテーマだったから他の4回生に比べ僕は非常に恵まれていたといえる。学生としてちょっとやそっとでは味わえない経験ができた。だから僕にとって卒論実験が大学生活の中で大きな weight を持っていることは否めないし，またいろいろなことが学べた。サボリ屋の僕が直接ポリプロについて学びとった知識は当然少いが、それでもある時は実験に本当に打ち込めたということが大きな収穫であった。いやいやにだらだらとする試験勉強には比べることのできないほどの能率と確かさで知識が身につき，瞬間ではあるがおよばずながら学問に打ち込むという気持が想像できるような気がした。大げさになったがとにかく学生である以上やはり本分たる学問するということに時々打ち込むということは絶対に必要である。大学生活の楽しさに遊びの占める度合は大きいが学問も楽しみそれに遊びを加えた楽しさを味わうのが大学生の姿であろう。もう一つ卒論を通して感じたことは技術革新ということである，我々はこの急激な科学技術の進歩にもっと注目しなければならない，特に我々の繊維化学科には関係の深い高分子化学工業の急速な発展，次々と建つ大規模な工場とそれから産れる新製品の数々、各会社はこの激しい技術革新の波に遅れず互にしのぎをけずって研究を続けているのである。そして研究内容，方法が漸進で規模の大きい研究体制を持つ会社が発展して行く。これからは少しでも研究に遅れをとった会社は落伍していかねばならないのだ。このような時代にあって我が繊維化学科も産業界の研究に遅れない新しさと大きなスケールを持つ研究に取り組まねばならぬ，即ち卒論生も雄大なスケールを持った新しい研究を新しい方法で行わねばならない。そして工学部たるものはその仕事が新しい産業に直接役立つようなものでなければならない。この点我が繊維化学科の卒論研究はまだ新しさ，スケールの大きさに欠ける

点が多いように思える。むろんこのことは本科だけにいえることではないであろうが、本科は幸か不幸か人員が少く卒論生が一つの大きな研究テーマをもらえそれを比較的自由に研究させてもらえる。会社に入ればどうせ一つの研究の端くれの端くれくらいを毎日やらされるのだろうから、こんな自由な機会はあまりないはずである。本学の性格からしてもっと産業と直結し時代にマッチした、いやそれ以上に産業界より一歩先んじた雄大な研究を行うべきである。そうすれば卒論生も会社に入って指導的な立場にたてる有能な技術者となり社会に貢献できるのではなかろうか。昨年もこの"chain"で4回生が力説したように繊維化学科のなお一層の発展と団結が望まれるところである。古いノスタリディに酔って小さな了見で小さな研究をしている時代ではないのだから。（ウカウカシテオレマセンゾ）

○友　達

大学時代はまた友達と語り遊びあう楽しさが非常に大きい時である。大学に入ってから知り合った友でもそれ以前からの友でもこの時代に真の友情が生れるような気がする。いろいろと悩みの多い時期に腹を割って話の出来る友を持つことはこの上ない幸せである。この場合男でも女でもよいが僕に男だから女友達はどうも特定化して恋人に発展する危険性がある。こうなるとどうもいけない。一生顔をつき合せなければならぬ奴とこんなに早くから付合っては当然損である。今のうちにやることが沢山あるのに年取ってからできることをそんなに早くしなくてもよかろう。僕はそんなことに大金を使う気にはどうもなれない（パチンコに金を使っても）。高校卒業時に各学年の担任の先生3人が口をそろえていった「君は学生の間に決して恋愛してはいけない」という言葉は我々は良く守った。もっとも守ろうとしなくても僕などは当然女性に相手にされなかったかも知れぬ。でも日本は女性の方が男性より人数が多いから当然僕にも当りがあるわけだから早まる必要はなかろうとたかをくくっている。しかしながら女性と話し遊ぶのはこの上なく楽しい。話するだけならそんなに金もかからぬから大いにすべきである。本科の学生はどうも女性と話をするのを恐れ内心話したいと思っている予備のかたまりが割合と居る様だ。年頃ともなれば女性の方でも男性と話し合いたいと思っているに違いないことはその辺の文献で明らかである。どんどん話しかけて理想の人を頭に描いておくべきである。（モテヌオトコノコクハクデハナイソモリ）

○下宿生活

僕は3回生から下宿した。それまで大阪から通っていたが往復4時間の通

学時間が惜しくてまた睡眠時間がなくて忙しいことこの上なかったからである。下宿をしてみると睡眠時間も長くならぬし忙しさも変らなかった。しかしその結果遊びの時間が倍増していた。"遊び"は僕にとっては"学び"である。だから僕は常に"よく学びよく学べ"を実行している。遊ばぬ奴はバカだというのが僕の信条だから学びでも何でもない単なる修業にすぎぬ試験勉強はけずれるだけけずった。がんこなおやじややかましいおふくろの顔が見えない気楽さ、スケ年の間金が残っていたためしのない月末のやりくり，めしのまずさと不満腹感、めったに気が向かぬがその気が向いた時にしか掃除をしない部屋、4回生ともなれば絶対朝9時に始まらぬ生活だからむさぼれる朝寝，このようにすべてが気ままな生活から得るものは非常に多い、学生の間には寮か下宿生活はやった方が良かろう。（カネハナクトモヒマハデキルヨ）

○京都に4年間学びて

京都は僕にとって実に気持の良い所であった。のんびりとした雰囲気，古い家並に緑の山，夜の河原町，散歩、勉強、遊び、居眠りすべてに適した場所である。でも京都は年取ってから住む所である。やはり若い時は東京か大阪で刺激を受けぬところな田舎におってはぼけてしまう。そのせいでぼけたのか僕もこの4年間ずいぶんむだに時間を過してきた。まさに光陰矢の如し、4年間の大学生活の意義をしっかり感じる間もなく卒業しそうである。パチンコ，マージャン，睡眠、飲酒などにふけっている時ではないのだが……。（「ワカッチャイルケドヤメラレナイ。」トイウトコロカ。）

彼

彼ったらきのうも私を
喫茶店に呼び出して
いうの、
女は好きと嫌いしかないから
扱いにくい、だって，
じゃ男はどうなのといったら
好きと嫌いは裏と表で
それらの反対が無関心、
無関心の開放感程
良いものはない、だって。
淋しいから私と話したいくせに、

彼ったら本当に嘘つき。

"意義"—このすばらしい畜生野郎！

4回生　早　川　和　彦

いたって月並の文句だが，この4年間ずい分，いろいろな事があった。テスト・実験・デモ・山・コンパ・繊維展，etc．そして、それはそれなりに，楽しかったし、勉強になったし、ためになった。（事であろう）

この様に書き出して来て感じる事は〝それがどうしたのだ？〟という例のいやな、かつぞっとする言葉である。全ての行事・経験は，それが終ってから二三年以内に、その影響が必ず現われて来なくてはならないものではない。即ち、近い将来に自分に，それが有意義であったという、利益が表われて来なくてもよい。一度経験したものは、本人が望む、望まないにかかわらず，本人が知らぬ内に，かなりの変動を与えるものだ。こんな事は、ここで述べる以前の当りまえの事実である。もろごとの終ったあとで，その意義がどうのこうのと論ずる事は、ナンセンスである。もし述べるとすれば，それは、これから先，何年か後になって実感としてあれはいい経験だったと感じる時である。（もっとも、この実感たるやあまりにもデリケートすぎる言葉だが）

自分が、やる事の意義なるものを考えるのは，少くともそれをやる前に、考えるべきである。この場合の意義とは，自分がそれを楽しいものであると知っているからとか、自分がそれをまだやって事がないから、またそれはかなり確実に面白いからという場合を除いては，直接，明らかに自分に得る所の利益があるかどうかという事である。それ以外の何物でもない。

人生感、恋愛その等のポピュラーな事を語る時，5～6年前の高校，浪人生活でひろってきた、漢字を並べたて、映画と小説のイメージにとりつかれ論旨不一貫なる談論を吠えたて，最後に〝皆それぞれ意見が固って来たのだなァ〟となる事程，くだらぬことはない。意義がないというのはこういう事をいうのであろう。私達卒業予定者をはじめ，それ以外の人も，少くとも男の人は、当世の、ムードとキャチフレーズにとらわれる事なく，シックだとかデリケートだとか，輝やかしい青春だとか、科学的だとか、若人の夢だとかのとりこにならず，もっと横着な、ゴウマンな、図太い〝もの〟になりたいものである。私は、スピッツやコリーよりも狼の方にあこがれる。

雪の日

4回生　名　取　和　信

23日昼から京都は雪に見舞れた。強風をまじえたぼたん雪がはげしく降りしきり、見るみるあたりは銀世界と化した。その夜雪にうまった道を歩きほの白く輝く雪景色を見てある種の感慨にうたれた。つもった雪を見たのは12年ぶりである。小学校の4年だったか大阪一帯に雪がつもったことがあった。その時学校から帰ると、一人でおもてにとび出し雪のふりしきる中で、いっしょうけんめいに雪だるまを作った。雪を見てむしょうにうれしかったのである。今再び京都に来てこの雪を見た時、その時のうれしさが再びこみあげて来た。雪がつもって平らになっている所は未だ汚されない最も清潔なもののようであり、そこに足をふみ入れることをためらう。しかし一方ではそこに足をふみ入れるのがこの私であることを望んでいるのである。
ふさな征服欲であり、南極や処女峰に足をふみ入れた時の気持と同じである。
雪の夜運動場を歩く時、うっすらと明るい中にひとりぽつんと立ち歩いて来た後に一すじの足跡があるだけで雪はなおもはげしく降る。すべてのものは覆い隠されている清い世界である。しかし一たん雪がとけると人の通いなれた歩きやすい道を歩かねばならない。

寮の四年間

4回生　海　野　悟

入学試験の最後の身体検査の時、運動場の横の汚ない古い建物を初めて見たのだが　これが4年間の生活の場所になるとは夢にも思わなかった。だが住めば都とは良くいったもので一月100円の寮費を考えれば今では何をか言わんである。しかし初めて北側の日の当らないがらんとした十畳の部屋に入った時は唖然としたものである。五月頃まで激しいホームシックにかゝり、超過料金をとられる程の手紙を書いたりした。そのうちに様子が分ってくるにつれ余裕が出来て遊ぶ事を考え出した。まだ街が不案内のためもっぱら寮

て遊んだ。将棋に始まりトランプ、碁、麻雀と発展した。最初はパイがないので紙で作ったりしたものだ。勉強の方も前期まではまだ真面目に授業に出てノートもそろっていたが、後期頃からだんだん真面目さが消えていった。というよりは地金があらわれてきたのかも知れない。がこの事に関しても今から思えばこの学校は就職は心配無いという気持が少なからずあったためともいえるし、一方で又この学校のおとなしい校風とかネームバリューの低さとか何かしらもやもやした気分に無意識に無意味に反抗していたらしい。二頃チェイン等に学生の自治会運動や社会運動について一回生が激文をとばしているのを読むにつけ彼らの自分なりに物事を確っかり握んでいる前向きな姿勢に比してこの頃の自分を物足りなく思う。二回生にもなると夜の街に繰び出しはじめた。酒を飲む事を覚え煙草をすい音楽喫茶等に入りびたるようになった。ガールフレンドを自慢したりうらやんだりしたのもこの頃だ。あやしげなバーに首をつっこんでボラれたりパチンコでスラれたりして金を嘆かせた。この頃には手紙は金を送れの用だけとなる。寮にあっては書物を回覧したり部屋の間の壁板をぶち破って通路としたり麻雀も刺激とスリルを求めて点ノで賭け出した。最も良く遊んだ時期である。三回生に入ると実験のためと専門課程で必須も増えてだんだん学校に居る時間が長くなり遊ぶ方もあきてきたのか悟り出したのか比較的おとなしくなっている。大人の自覚と将来への目覚めがあったのかもしれない。辺りを見回す落つきがでてきている。そこで賢明にも遊ぶ時は寮で勉強は下宿でという方式をとり入れる輩も現われた。そして又賢明にも寮生は彼らの来訪を歓迎したのである。

四回生になり就職も定まると後は卒論実験だけで寮生も少くなり寮も静かである。自分一人の時間が多くなりゆっくりと寮の周囲に目が向くようになる。寮の西には遠く愛宕山がかすんでいて夜には愛宕星と呼ぶ青い光が見られる。手前にはケヤキの間に妙心寺の屋根がみえる。この寺の鐘は朝と三時に鳴る。徹夜の時以外には聞くことは無い。南ではいつも煙突が先ず目に入ってくるので他のものは忘れている。東の空はいつも街の灯で赤い。冠雪の月夜の雨を降らしながらいつも未だ寝もやらぬ人間がいるんだなあと思える。北側は見ない。ヤニ寮舎しかないから。初めて入寮した頃には桜が数しかなかっていた。裏門には八重桜が咲き寮の中庭には山桜が五月頃まで咲いていて色々の種類の桜がある。さすがは大学だと驚いたものだ。夏に名も知らぬ花が中庭の喬木につく。昨年の台風で大木の枝となったため坊主にされた。又蚊が多い。秋は冠際に柿が実る。遅くまで木についているのを見ると美味しい。冬は南天が色づいてごんわりと冷える。ただでさえ遅寝遅起きなのに

部屋に斜めに射す日が顔に暑くなるまで布団の中にいるようになる。朝飯はぬきで夕食と夜食を採る。食生活が不規則なためどうしてもやせる。家に帰って肥えて来て寮でやせる事をくり返すのだ。

こんな寮生活ではあったが精一杯青春を楽しみ大学生活を満きつしたと後悔はない。何よりも同じ釜の飯を食った親密な仲間を得た事が嬉しい。比較的人見知りする方だったが、これらの寮の友人を通してC科の連中ともすぐ親しくなり、他の科の人も下級生も上級生も知るようになった。スクラブ活動も参加し種々の行事にもよく引っぱり出されたりしてよい想い出を得、又経験にもなった。他人の飯を食うといったら大げさかもしれないがこういった生活から親の羽の下から温々と通って大学生活を送った連中とは違った何かを身につけてこれからの社会での生活に役立つものと自負している。近頃よく思うのだが、卒業後何処にあってもちょっと大きな両につけ風につけ、寮は大丈夫かなあと心配するようになりそうな気がしてならない。

わすれられぬ事

4回生　木　田　文　夫

それは、高校三年の修学旅行中の事であった。多分別府だったと思うが、遊覧船よりおりて僕らは、5,6人一緒になって、右手の美しい海の方を見て楽しく雑談しながら歩いていた。ふと、何の気なしに左方に目をやると、そこは僕らの歩いている道よりずっと凹んでいて、そこで1人の若い船大工が、大きな木槌で木の船のある箇所を打ちつけていた。それが僕の目に入って1秒とたたないうちに、何と見事に打ちつけていた槌の先が「すぽっ」と抜けたではないか。僕は今までの雑談の楽しい気分もあり、その若い船大工のあきれたような間抜け顔を見て、瞬間的に「げらげら」笑い出してしまった。その時若い船大工の顔は、一瞬紅潮し，そして青ざめたように思われた。僕はそれを見てまだだらしなく笑っていた。その船大工は僕を凝視し，それから先の抜けた木槌の柄を持って僕らの歩いている道に通ずる坂道を一目散にかけ昇って来たではないか。僕はこの時程びっくりした事は、今までに一度だってなかった。こちらに向って来るその顔には殺気があった。僕はその勢いに一瞬ひるみ、それから本能的に前方に向って逃げ出した。交通のひんぱんな電車通りも、意識せずに逃げた程であった。幸運にもその場はうま

く切りぬけた。後にその時一緒に歩いていた友達にあって聞いて見ると，その船大工は、彼らに僕がどこへ行ったか太い木槌の柄をふるわせながら尋ねていたそうだ。このような事があってから，何事においても軽率に自分の感情をすぐには顔とか動作に出さないようにしようと思うようになった。しかし未だに実行されずじまいである。これは性格によるのだろう。

猫の条件と人間の条件

1回生　井　上　長　三

ネコがトラになる話

去年の暮，もう各種のもちもそろうほどヒもおしつまり，人の出入りもなく，大掃除も一段落，テレビも師走の町々がなりたて，なんとはっきりそわそわと，正月気分の湧いた日だったが，その日テレビで見た実験だけは，はっきり印象に残っている。ウィーンだとかでやったものらしいムだそうだが，心理学実験の一つではなかろうかと思う。

まず味もそっけもない小さな室に住むかわいい猫が画面に登場する。二二反対かなにかで，空腹というやつをほどこされているらしい。腹がすくとンドカをふんで，餌の出る箱に近づき，足をつっ込んで好物の魚あるいをたべるのである。そうしておいて少し細工が試みられる。猫が魚の入った箱に足を入れた瞬間，猫の顔に冷い空気が勢いよくシュッと吹きかけるようにしておどすのである。猫は何度も足を入れて魚を取ろうとするが，そのたびにおどかされてついにあきらめてしまう。しかし腹がすくのですぐスハンドルをふんで餌の出る箱に近づいてくる。そこで次はなにもおどかさずに魚をたべさせる。こうしておどかしたりおどかさなかったり，食べさせたり食べさせなかったりすることをくりかえしてゆくと，その猫はだんだんおちつきがなくなり，不安そうになり，しまいにはうろうろするばかりで，ハンドルをふんでも，箱の中に足を入れる勇気がなくなり目の前に出て来る魚をながめしそうにながめているというふうになってしまう。腹のへったあわれな顔をして，もとのかわいい猫もノラネコのようになる。ネコがノイローゼになったのである。ころあいを見て悪意悪な手がアルコール入りのミルクを差し出す。なにしろ腹がへっているのでアルコールの臭いもかまわずがつがつ飲んでしまう。たちまちにして全身アルコールが巡回し，ネコもよいこころ

もちになってノイローゼも吹きとばしたらしく、俄然ようすがかわってくる。恥も外聞もなく猫はチドリ足でサケのサカナをとシャレこむのである。こんどはいくらシュッシュッとおどかしても効果もなく，猫はウィーと酔ったいきおいでつぎからつぎへとハンドルをふんでサカナをたいらげてゆく。ここの場面は、へべれけになった男がイカのウニづけでもつついているところに、舌をペロリと出したネコの像をやきつけたものを頭にうかべればけっこう。大トラになった猫が小さい皿をところせましと濫投してくれる。ところが酔いがさめてくるともうだめである。シュッとおどかされて又もとのようにシュンとなってしまう。そこでまたまた腹をすかした頃をみはからってアルコールミルクが出される。というぐあいにして続けてゆくと，しまいには、ネコはアルコール入りのミルクしか見むきをしないようになる。そしてひたすらアルコールミルクが出て来るのをまつようになっていってついにアルコール中毒におちいってしまう。ハンドルふんで魚の切れをたべるということはしなくなり，寝そべっていて　アルコールミルクさえあれば気げんがよいというおそろしいトラネコの顔がクッとアップになって、この残酷なドキュメンタリードラマは終った。

自然のまゝならアルコールなどは見むきもしない不コを，手の込んだカラクリでアル中にまで追いやるとは，人間も罪なものであるが，それにしても考えさせられる実験である．人間でも酒をたのしんでさえ飲めば，少々飲んでもアル中になることなどはないそうである。アル中にまでなるにはかならずそこになにか、酒を生きがいにまで追いやる生活上の条件がせまっているのであるから，酒をむきになって飲み出したら，早くその理由を見つけてそれをとりのぞいてやることが先決問題だとテレビでも語っていた。

ノイローゼになったり、アルコール中毒になったりするというのはもちろん人間の極端なそして特殊な場合である。上の実験は，その特殊な場合にいたる過程の間の条件を最も簡素化した動物的条件にかぎって示したものである。人間の場合はこんなに簡単ではないけれども腹がへったら物をたべたくなるという点では猫とおなじであり、違う点は人間は感性から理性にいたる認識能力をもっていること、人間をとりまく条件ははとんどすべて人間自身が作っている社会、人間関係によってもたらされるものであるということである。だから人間は猫を操作することが出来るが，猫はそれを認識することが出来ないのである。しかし本当に我々人間はこの猫を同情的にけいべつすることができるだろうか。人間はその人間自身が動かしている社会と人間が内にもつ条件を本当に認識しているだろうか。人間をとりまく純粋に外的条

件＝自然に関しては我々はそれを完全に認識しそれによっておこる問題の解決の方向は希望をもって見ることができる。しかし一たん人間社会の内の問題となると往々にして人は人間の理性的認識能力を放棄してしまうことが多すぎるのではないだろうか。そしてきわめてせまい自分のごく身のまわりの実感にたよりすぎるのではないか。そんな実感でのみ物を判断しているときその人は、実験に供された猫と同じくあわれな存在であろう。せまい実感というものがどんなに頼りのないものであるかは猫の実験で明らかである。たとえば猫がもともとアルコールの臭いをいやがるのはいわば猫の実感である。ところが猫がアル中になりかけたとき、アルコール入りのミルクしかのまないのも又そのときの猫の実感である。どちらの実感が正しいかは別問題として、後者の段階における猫の実感が，実はネコ本来の実感ではなく人間がつくり出した力ラクリによっていわばむりじいされたものであることは我々の目に明らかである。ただ猫はそれを認識出来ずそのときそのとき自分の頭の中におこった感じで，即ち自分の実感として行動しているのである。自分の頭の中におこったものだからすべて自分のものであると思うのはまちがいであることがこれでわかるのではないだろうか。人間の社会の作り出す条件と人間が内にもつ条件との関係は無限に複雑であるということを理由に、我々が自分の実感のみにによって行動するとき，我々は実はその条件によって左右されることをみとめることに他ならない。今日までほとんどの人がかくの如き『猫の条件』にあまんじていてきずいてきた歴史がこれである。この人間の歴史をこれ以後少しでも早く，今までの非をくりかえさない方向にむけるのには、すべての人が人間に与えられた能力の行使を実行するということになるのではないだろうか。

この四年間

4回生　三宅佳代子

中学生みたいだった私が、どうにか大人の仲間入りを許される様になったのも，この4年間なら

あまり好きとはいえなかった化学に、大いに興味を持つ様になったのも、この4年間だし、

さまざまの性格の人々を真近に観察し、人間くなんとおもしろいものかと思うに至ったのも、

京都の神社、仏閣、庭園等を見て歩いたのも

全て、これ、この4年間においてである。

ある週刊紙で次の様な記事を読んだことがあった。

名古屋工大かの女子学生で入学した時から卒業するまで、

食堂へいっても1人ぼっちだし男子学生ばかりで食事も出来ず，又一言も言葉をかわすこともなく，何度退学したいと思ったことか

就職が早く決って、女のくせに男を出しぬくと悪口をいわれ，男子ばかりの大学に来たことを後悔したこと etc.

その記事を読んで，私は何と、しあわせな学生生活を送っていることかと、しみじみと思った。

孤立してしまうこともなく，いつも仲間に入れてもらって楽しく過ごしたこの4年間

先生方，先輩や後輩の男子学生、そして特に同級の男子学生，皆さんに私はここでお礼をいいたいと思う。

本当にありがとうございました。

いろいろのご親切を心から喜んでおります。

いろんな事のあったこの4年間を締めくくってくれるものは、やはり、4回生としてすごした研究室と卒論である。

時代の超先端をいく相宅研で，ポリプロの染色をやらしていただき、幾多のおもしろい目にも会いました。業界というものと，学界というものとが如何に不可思議なものかも、かいまみました。

研究室の先生を始め、大勢の研修生方と直接に接して、学びとったであろう物が何らかの形で私の将来においてプラスになるにちがいないと思います。

上役論

岩崎眉庵

此頃の学生諸子は猫も杓子も大会社へと志望する。勿論それにはそれなりの理由があるので大会社にはたしかに良い所が多々あるからである。併し大会社へ入ると言う事は組織の中の一つの生きた歯車になり下がると言う事である。成り下がると言う言葉はまことによく実態を表わしている。大会社では上級の歯車と下級の歯車とが次々に互にかみ合わされて壮麗なる組織の殿堂が出来上っている。各の歯車は一定の規格に合格しなければならぬがそれ以上の性能を要求されていても却々その価値をみとめてくれない。じっと辛抱していることの機会が来るのを待っている。その間に流石の英気もすり入って目出度く停年族の仲間入りを待つのである。と申して怠けて横着して宜いかと申しても必ずしもそうでない。失敗でもしようものなら恐ろしい制裁がくる。勇い事勿れ主義、万事無難主義の消極主義の無気力安隠な人間になる。いやしくも覇気のある大丈夫の耐え難き所であるが、その耐え難きを耐えなくては大会社では飯が食へない。まことにクソ面白くもなき世の中である。大会社の幹部はこんな事ではいけないと悟り口口では随分唱へるがさてどうにもこの様がないらしい。昔昔、日本経済の成長時代にはもっと面白い世界があった。所謂発展途上の中小優秀会社と言うのがあった。有能で覇気のある事業家の下で夜も昼も分らぬ程にコキ使われるが、その苦労に幾倍して報われ又やりがいのある面白い仕事が出来た。たとえば発展時代の帝人の如きはその一つであろう。今日では中小企業もすっかりかすんでしまっていじましい点だけが加っているだけだから始末がわるい。そこで勇い組織の中の生きた歯車になり下るほかないがそのときに第一に心得べきことは直接上司同僚直接下僚との折れ合いである。就中直接上司との折合である。組織では調和とか折れ合いと言う事を極端に重視する。そこで屢々直接上司との折合不良と言う悲劇が起る。上司と言うものが単に年が上と言う以外に頭脳的に学問的にも技術的にも人間的にも部分的にも綜合的にも自分よりすぐれていると決ってさえいれば世の中は泰平である。若し其様な上司にめぐり合った人はまことに幸福この上ない人であって、改めて自分の幸運を神に感謝すべきである。併し現実にはその反対の場合が起る。それは自分が部分的に或は綜合的に上司よりすぐれておれば居る程起り易い。このときの悟り方が大切である。第一に自分

を一個の英才であると言う自ぼれを徹底的にすてる事である。自ぼれの垢を洗い落しても尚は少々黒字の残る場合でも潔くこれをお預けにする。これが一ケ條である。次に自分は組織の中の一歯車になり下がったと言う事を改めて悟る。この組織に見離されては三界に己れの生きる所なしと観念する。これが二ケ條である。技術屋にお天と様と米の飯はついて回るもんだなどとはとんでもないことで心得違いの頂上と心得るのである。次にその不良上司の身になって考へてやることである。不良上司の意に逆わず、これと争うことなくしてしかも彼をして大過なからしめず、それのみか若干の成果の上がる様にしてやる。これはまことに過分のことである。併し過分のことをせねばならぬのは自分の非運とあきらめるのである。そうするとその努力はいつかは必ずプラスとなって自分に戻ってくる。これが三ケ條である。不良上司と一々かみ付くなどは下策中の下策である。傷つくのは必ず下僚たる自分である。それが組織と言うものである。この三ケ條、言うは易くしかも行うことは実にむつかしい。併しその難きを忍んで難きに耐えなくては大会社の飯は食へない。友成九十九と言へば天下の英才である。そして極めて向う意気のつよい男である。其方の代表見たいな男である。英才友成が随分と凡庸上司に悩された事は当然とは申し乍ら想像以上のものであったらしい。しかし其友成でも決して向う意気一本ではなく常に己れの到らざる所をこれ憂うと言って反省しつゞけたと言う。その直話を聞いて流石はこれある哉と筆者は敬服を新にかにした事があった。相撲の世界では兄弟子と言う字は無理偏にゲンコと言う字を書くと伝へられる。上役と言う字は無能偏に威張ると書くと心得べきである。

CHAINに思う

2回生　有　松　利　雄

CHAINのあり方、特にその内容について論議がかわされているようである。その中でも一回生の人の批判・要求といったものはかなり痛烈であるようだ。(大いに結構だ。)

CHAINはどこからも押しつけられたものでなく、このC科から自主的に生まれ、そして育ちつつあるものだと思っている。そうすれば、C科の学生・先生・…… etc. が主体である。ところでこれらの人々が一種の集団

まとまりをつくっているのは何によるのだろうか。ＣＨＡＩＮという雑誌の為ではない。お互いに一生のうち一度も会わないで終ってしまうかも知れない人々がこのような一種の集団をつくっているのは何が原因なのだろう。学生は日本の、大学で、しかも繊維化学について勉強しようとしている。そして年令はといえば２０才前後であまりたいした巾もない。そして、日本の、京都ないしは京都周辺に住んでいる。その他色々の共通点があるだろう。先生は先生で……。etc　この中からＣＨＡＩＮが生まれたのである。そうしてみるとＣＨＡＩＮの主記事が政治問題であって良いのだろうか。いやいやそうではない。文芸作品がその主たるものであってはどうか。いやいやそれもいけない。それなら学術関係のものだけではどうだろう。それも不可だ。それではどうしたらいいのだろう。学術関係のものあり、政治問題ありで大いに結構だ。或は文芸作品があっても別に悪くない。或はもっと身近かなもので僕達の住所録みたいなものを入れても良いだろう。とにかく我々全員のものであったら良いのだ。ＣＨＡＩＮも昨年度までは年二回しか発行してなかったようだ。これでは問題提起をしてもその効力は相当薄れるだろうし、ものによっては一方的宣言にならぬとも限らぬ．僕は発行回数を増すように要望したものの一人である。そして内容はともかくも発行回数を確保し、話し合いの場としての地位をかためるのである。そうすればお互の話し合いで、内容は良い方向へと向かうのだと思う．しかしここでわすれてならないのは、ＣＨＡＩＮが我々から遊離してしまってはいけないということである。我々全員のものであるということだ。その我々は前に述べたようにある偶然によってここに一団となったものである。この二つのことＣＨＡＩＮは我々のものである。その我々はある偶然により集団をなしているということ）を念頭において，楽しい（勿論有益な）ものにしましょう。二つのことを念頭においておれば少くとも重荷になるようなこと（時折「原稿をかかされる」とか「ＣＨＡＩＮを買わされる」というような言葉であらわれることがある。或は重荷と思ってかどうか知らないがこの試みに参加すまいとする人もいるが）はないはずである。

『化学が嫌いになった時』

―― 卒業を前にして ――

4回生　真　多　勇　夫

我々も過去3回先輩を卒業生として送り出してきたが4回目は我々が送り出される番になった。これまでは「よそ事」として大した感慨もわかなかったけれども、自分自身の学生々活もこれで終りかと考えれば社会人として来るべき将来の希望に胸ふくらませながら感慨ひしひしと迫るものがある。

何のために化学を専攻することを志したか？　これはみんなそれぞれその動機は異っていても化学が好きだったからに他ならないからである。私も化学が好きだった。しかし入学してから後、何度か嫌いで嫌いで仕方がなくなった事がある。人生に幻滅を感じたような気がしたのもこのような時だ。このような時には結局空虚な気持でずるずるとそれまでの習慣に引きずられて過すうちにまた元に戻って生きがいを見い出したような気になってしまう。しっかりした信念を持った人から言えば修行が足りない哀れな輩と見られるかも知れないけれども、本人にとってみればどうすることもできない。

同時に確固とした生きる目標といったものも持つことができない。しかしながら人間の持つ自信とか信念とかいうものほど脆く崩れ去る幻はないだろう。いつか少し前に私がCHAINに投稿した文に対して,一回生の血気にはやる反抗期の典型のような方が、微に入り細に入って攻撃していたが，それに対して弁明する気にならなかった。いくら私だって彼が親切に忠告してくれた事を知らなくて書いたのではないからである。彼だってほんとに真剣に考えればきっとあのような一本調子で解決できない事に気が付く筈だと私は思っている。しかし何か偽りでもよい。目標をもって生きたいという希望は矛盾にすぎないものであろうか？　確かに矛盾でありこんな時非常に迷う。迷った時こそ人生に対する試錬のチャンスでありいかに考えるか自分の向上する踏台となるべき一段階なのだ。それにも拘らず私は今までずい分とこのチャンスを為すことなく見逃してきたような気がしてならない。

だから化学が嫌になった時にも特に何のために化学を学ばねばならないか何のために生きているのかを苦しいことかも知れないが自分を深く掘り下げて本当に悩むだけの勇気は持ちたいものだ。

科学とだいたいと恋人

3回生　岡田卓二

例年通り正月が来たら逃げるようにして、スキーに行くことになっていて今年の正月も雪の信州，野沢へスキーに行きました。今年は元旦に京都を出るつもりだったのでさぞかし満員と思って名古屋まで早く行って名古屋から中央線で長野へ向った。夜11時過ぎの汽車に乗るのに昼過ぎに名古屋へ行って整理券をもらって荷物を置き名古屋の街をぶらぶらして10時間程の時間を費した。パチンコをして30分も費すことが出来ず，映画を2回見ても4時間を費すのがやっとで，落ちつく所正月早々であったが喫茶店で費すことになった。年末からの睡眠不足で喫茶店の片隅でウトウトしながら暇に任せてこんな事を考えていた。そばでうなっている調子はずれの音楽も一向に苦にならず教室で聞く子守唄のような感じでした。

科学に絶対の信用を持っておられる方がおられたらこの随筆を読む必要はありません、時間のロスだから——

でも大部分の皆さんは程度の差こそあれ科学に疑問を抱いているのではないでしょうか。そう様もそのうちの一人なのです。

そもそも科学とは何であるかそれすらも分らないのです。ある人の言によれば科学とは因果律、分析と総合，それに統計的考察を持っているとの事です因果律、むづかしい事ですね、まだ物心つき始めた頃から誰からとなく聞かされた善を為せば天国極楽へ悪を為せば地獄へという浄土思想を真面目になって考えていました。そうこの精神です。こうこういう原因があるからこういう結果になるというのが因果律なのですね。現代のように錯雑したテンポの早い世の中ではその因果律がしばしば判らなくなってしまうのです。

そうです科学は進んだとはいえまだまだ因果律の適要を受けない次元がある その例は後にして、現代のように一見科学化された世の中では全く不合理な因果律で煙に巻かれるのが又現代社会を支えている人間なのです。

"風が吹くので桶屋がもうかる" というのも極端な場合の因果律です。

だから今日に於ては分析と総合という事が非常に大切になってくる，すなわちますます込み入って来る社会で人間が社会に果す役割というものが微少になってともすればその部分にのみカッカッ来て全体，総合という事を忘れがちになる。それすらも意識しない人が如何に多いことか、個人で昔の英雄のように社会を動かす事が出来なくなってしまったので社会という大きな組織

の中に又組織を作らねばならない。そして一人の人間というのはその組織の中では一つの歯車にすぎないのです。
ともすれば他の歯車の方が良いように見えがちです。俺より彼らの方が大きな仕事、良い仕事をしているぞと、でも科学には高級も低級も、価値の大小もかぼちゃもへちまもない筈です。だから4回生の方に言いたい、立派な歯車になってくれと。ただ盲目的に歯車を回すのでなく自分の意志によって回転させ正当と思われない回転に対しては歯車の回転をstopし又全機能をマヒさせてしまうかも知れません。すべて許容範囲内で歯車を動かさねばなりません。
次に統計的考察これ又科学の限界を思わせ我々人間にとっての存在意義を見出せるような考察です。統計といえばむずかしいようですが統計程気楽な対象はないようです。木津さんの統計を想い出す方は不幸です。統計というと"だいたい"という言葉がありますね、このだいたいの言葉でもってこの社会は動かされている。科学には絶対という事はない。だいたい飛行機は落らないもの、船は沈まないもの、ダンプカーは人を引かないものとして皆が認めているからこそその存在が許されている、その信頼度が90%か99%か99.99%かは分らない。ただ私に判るのは100%でないという事だけである。
私はこの"だいたい"という言葉が好きです。このだいたいという言葉は便利なもので学校の講義でもだいたい出てだいたい分ったと思っておけば気は楽だし試験でもだいたい出来ればだいたい単位もとれ、だいたい単位も取れば知らぬうちにだいたい卒業となり、就職し…… すべてこの世の中は"だいたい"で通っている"だいたい"論義はこれ位にして科学に最も大きな不信を持つ理由の一つとして科学には二面性があるということ——。
科学というのは非常に立派です、偉大です、もしこの世に神というものがあったとしてもその神以上に科学は偉大です、というのは人類のPractically な意味で大いに役に立っている——— 政治、経済、工学etc.
科学は偉大です。強力です、一度に何千人、何万人もの人を殺し科学それ自身が築いて来た美しい町を廃虚と化すのも訳ないことです。けれどもそんな強力な科学でもたった一人の恋人の心を捕える事も出来ない。
若い二人がその本能に従って異性に魅力を感じ恋し合うようになる。彼女に恋を感じ、彼女がたまらなく好きになってしまう。そしてただ会っているだけで瞳を見つめているだけでもこの上もなく仕合わせと感じている二人にとっては科学というものは全く無用のものとなる。
科学（心理学）の因果 や分析と総合、統計的考察等の入り込む余地さえな

いのである。
もともと科学というのが絶対的なものでないのであるから恋愛とか幸福感等生ある人間（又性ある人間）にとつて自然に起つてくる感情に入り込むすき間もないのは当然の事である。
もし科学が絶対で万能となつてしまつたら人間は科学によつて生きる望みを絶たれる事になる。恰もsexも何もかも失つてしまつたように——。
ただどんなに科学が進歩しても人間として生きる权利と義務を有する我々が科学という人間の作つたものに圧倒されないだけの良識を持ち続けねばいつ間にか地球上から人類が昇華してしまわんとも限らない。

雑感

4回生　吉井詢二

◦随分前の話で恐縮であるが、某社の面接時の席上で，重役の一人の方が言われた言葉が，少々，心にひっかかったのである。それは『君は、会社の研究所に入って，一生無駄飯喰いに終っても，何んとも思わないか』と言う主趣のものであった。如何なる心積りで，その方が言われたのか真意の程は、解らないが，額面通りに解すると〈給料を頂戴した上に、会社の研究費で、研究を行い，君の行った研究が、何一ツ．会社に寄与する所なく，一生、終わったとしても，何ともないのか〉と言う事になりそうである。実際の所、海のものとも，山のものとも，解らない基礎研究に、これから入る者にとって、這般の質問を受けるのは、甚だ　迷惑な事である。研究が実るのも実らないのも，（特に化学に於いては）やってみない事には解らない。云わば，可能性の問題であり，又〈研究者〉$\overset{}{\underset{equal}{=}}$〈無駄飯喰い〉と考えている，古い頭の持主も，経営者の中には、居るもので困った事である。
◦所謂、会社の研究——基礎研究——なるものも，企業が行う投資の一種である。一体，投資（Investment）と言うものには、常に，risk が付きまとっているものであるから，投資した資本が，全て丸丸と太って，投資者の懐に収って来るとは限らないのである。だから，万が一，研究に投資した資本が価値ある製品（利潤）を産まず終いになったとしても，その責任の端は、投資した側にもある訳で，有能な技術（研究）者かどうか、見抜けず投資した方の自らの経営的無能振りを暴露しているに他ならない事にもなる。
◦又，或る研究成果が如何に，学問的に立派なものであったとしても，その研究が，実際に、企業の利益と結びつき経済的価値を産む物でなければ，

利潤追求を目的とする会社の研究としては、正鵠を得ていないものであろうし，利潤と結びつかない様に、一見，見える研究を行う者は、経営者の目には〈無駄飯喰い〉として映ずるのかも知れないのも無理からぬ事である。即ち経営者達は（基礎）研究から，莫大な利潤が得られる事を期待しているのである。（基礎）研究と言う名の会社における研究には、多かれ少なかれ，こう言った特殊性（限界）がある事を吾々は再認識しておかねばならない。

然し，現実には、企業の研究投資は，年々、盛んになるようで、基礎研究は、決して、無駄飯喰い的なものではなく，もうかる投資であるらしい。見聞する所によると，海外の大化学会社等では、いづれも，年間売上げ高の5％前後を研究費として、投じている由であるが，その充分な研究費から，日頃、お目にかゝっている，様々な、優れた技術，製品（資本的価値）が生れているのである。現に，アメリカの著名な化学メーカーでは、年間売上げの半分は，廿年も前に行なわれた研究の成す所であるそうな。所で、一方，我国の現状はどうであろうか。近年，基礎研究の重要性が認識され始め，その投資額は漸増して来ているようであるが，くまだ直遠し〉と言う感がする。金の卵を生む鶏に，充分な餌も与えずに、（卵を生まない原因を鶏に転嫁し）終には，鶏を絞殺してしまい，元も子も失なったというのは，二千年前の泰西の寓話のみの事であろうか。研究費不足の原因は色々考えられるが，日本の企業の体質の問題，即ち、我国の企業は，まだまだ、外国に比べると高い利益を上げていず（資本の蓄積が少ない為に）充分な資本を研究に投入出来ない。従って，研究費の不足は、新技術の開発に遅れを取る事になり、何時迄も、外国技術の後塵を拝さなければならない破目になる。これでは良く言われるように〈いたちごっこ〉である。

貿易の自由化が始まり、国際競争の矢面に立つ時，外国技術と立打出来る為には，独自の技術（研究）の開発と言う事が，必須の，当面の課題であろう。〈独自の能力で開発した優秀な技術が高収益をもたらし，巨額の資本の蓄積が充分な研究投資を可能ならしめ，尨大な研究開発が，又新らしい優秀な独自の技術を生み出す。〉こう言った，サイクルの軌道に乗せる事が是非必要である。

しかし，外国技術に遅れを取る原因を全て，資金不足のせいばかりにするのは、誠に恥かしい話である。

最後に寺田寅彦のことば〈器具が無いから，実験出来ないと言うのは実して，器具がないから，実験出来ないのではなく、頭がないのである。〉

接線

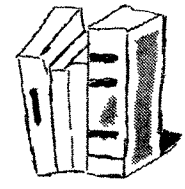
4回生　荒谷善夫

彼は今日も接線を進んでいた
向心力と遠心力との谷間を
向心力の絶えた時飛躍を感じた。
次の瞬間遠心力の支配に反発した。

彼は今日も接線を進んでいた
向心力と遠心力との谷間を
遠心力の絶えた時飛躍を感じた。
次の瞬間向心力の支配に反発した。

彼は今日も接線を進んでいた。
そう思った時
無力の場にいた。
未来への不安に恐怖した。

彼は今日も接線を進んでいた。
そう思った時
向心力と遠心力への支配を感じた。
未来への自由に歓喜した。



過去約
本大学外
く考えて
るという
生きた英
年同じ内
る。必須
と思う。
なければ
かろうか
繊維化
連中がほ
あり、一
ある。は
化学を主
れらの要
価値なる
るのだが

雑　感

4回生　近　藤　正　昭

過去約4年間の大学生活を回想してみて，印象に残った授業のほとんどが本大学外から来ている講師の方たちの授業であった。このことをもう少し深く考えてみると，講師達がうちの教授等に比べて年令が上で経験をつんでいるという事実はほとんどなく，大体に於て年令から言えば逆の場合が多い。生きた英語を知らない人が英語を教えていたり，ひと昔前のノートで毎年毎年同じ内容を講義している人に興味を持てというのがもともと無理な話である。必須であるが故に不快感をこらえてノートを取ったのは僕だけではないと思う。このようなことは学問の進歩というものを全く頭に入れず講義をしなければならないと言う義務感でもって授業をすることに由来するのではなかろうか。

繊維化学教室の研究室の配分にもはなはだ不満を持つものである。C科の連中がほとんど使用せず他の科のものが我もの顔に使っている大きな部屋があり，一方では研究室の定員の都合上卒論生を希望通り吸収出来ない部屋がある。はなはだ理解に苦しむ事実である。繊維化学である以上，分析や物理化学を主体とする研究室があってもいい，またあってしかるべきである。これらの要素をもとにして考えてみると，例の研究室の我々教室における存在価値なるものが非常に影のうすいものにならざるを得ない。このように考えるのだが如何がなもんであろうか。

「停年を前にして」

浜　村　保　次

停年などと言っても，人事のように思っていたが，現実にこの三月退転することになって来た。今更どうと言うこともない，日常ではあるが，いざこうして年をとってみると，又感なきにしも非ずと言うところである。

私がこの学校へ来たのが昭和十年であるから　既に二十六年になる。この間，私は科学と一灯園生活の両道を歩いて来た。そして科学と宗教を自分の身体で一つにする事の為に，自分を捧げて来たつもりである。全てのよろこびも，かなしみも，みなこの琴線に触れて出て来るようである。

停年を記念して随筆集を出せと言うことで，古い原稿を集めて見たが，この線をはづれたものは一つもない。いづれは読んで貰いたいと思っている。私の研究室の「吻心不二」の額は，端的に其の方向を示している。

えらく気負ったことを書いてし言って，申わけないが，二十六年の生活を大づかみに書くと，こう書くより仕方がない。これがよいとか悪いとか言う問題ではない。しかし何も初めから計画をたこと，其の方向に歩いたのでもない。一灯園の生活を，つきつめ，又化学の研究に打ち込んでいて，自分に得られた方向である。科学者が二，三の宗教の本を読んだり，ひどいのは宗教の何たるかをまるで知らずに，二，三の坊さんや牧師さんの行動だけを見たりしただけで，宗教を論じ，又宗教家が原爆や水爆を見て，科学を論じているのを，散見するのであるが，全くどうかと思われる。科学も宗教も一つになったものが本来人間なのである。これを分離して，お互にけなし合っている事，自体が妙であって，人間は宗教を呼吸し，科学的に動いている動物である。同じように，世の中は，全く矛盾したように見えるものが，一つになって調和を保っている。これが見えるようにならなければ，ほんものでない。我々は常に矛盾した一面だけに立って，これが正しいと，自己主義をやり，お互を許そうとしない。これでは争は絶えない。人間は草と言ってしまえば，それまでであるが，それを消す道があるのに，誰もしようとしないのが残念である。

さて，ここらで，二十六年の思い出を書く事にする。二十六年の過去の暗の中で，明るく光っている処が四ケ所ばかりある。第一は，この学校へ赴任

して間もなく，一灯園を知り，人生の革命を経験した頃，オニは大戦の前，学生達と箒木を持って京の町を，掃き歩いた頃　オ三は二十四年頃の学校騒動を下座の立場から美しく解決した頃，最後のオ四は，赴任したときからの懸案であった「蚕は何故桑ばかり喰べるか」と言う，小学校の子供の考えるような単純なしかし根本的な問題の解決ができた時である。

これらの事を一つ一つ書くと面白いのであるが時間もない。振り返ってみると私にとって，この二十六年はよき人生であったとしみじみ感謝している。又二十六年間，数多く接した学生諸君にも，少しも変らない気持ちで接せられた事は顧みて極めて楽しい事であり，このような，ぶんいきに過させて貰った事に対してお礼申上げねばならない。

二，三日前から朝日新聞に「停年退職」と言う小説が書かれている。まだ二，三回であるから，どう発展して行くか興味をもって読んでいるが，今日の処は，停年と言う，言葉が出たとたんに暗いかげがさしているのであるが，私の場合は，そのような感じは少しも出て来ない。「老兵は消えて行く」でいつでも現場からは消えてなくなるが，夢は虹のように輝いている。今後とも御支援を期待する。

日曜日

4回生　三　辻　　勝

私も少なからず京都を愛するものの一人である。想い出多い学生々活を送った地として，一つ一つの場所が自分の成長課程をみる様な気がする。その学生々活も最後の年になってその一つ一つの地にもう一度歌ってみる気になったのである。そうして試みたのが日曜毎の京都探勝である。たわいもないことばかりではあるが，その時々に書き置いてあったのを，まとめてみることにした。

12月10日（晴）初冬の感あり，すっかり葉を落してしまった街路樹があまりにみすぼらしいためか小枝が切り落されてしまった。後に残った太い幹が，寒風に逆ってつったっている様で心強く思う。今日は宇治，醍醐を回る。平等院鳳凰堂では，ガイドが押し殺した小さな声で，あたりをなめつくす様に流暢に説明するのが面白い。途中何度も「……が」とか「……ですが」とか「が」が多く出てくるのが気になりはしたが，かえってそれがその流暢な調子になくてはならない様で，ほゝえましく思った。阿弥陀如来をはじめてみる。自分

の感じ方が弱いのか別に感動は受けなかったが、伏目の目だけが不思議に記憶に残っている。静かに心を見透す目である。
平等院を出ると、とたんに甘ったるい茶の香りがして、奥歯のあたりがひきしまる様だった。ひそかにこゝに来たことを喜んだ。茶の方は帰りにして、塔の島へ出た。釣師が急流にウキを浮べていた。長靴をはいてウキをみつめている老人の姿をみて、何を考えているのだろうか、いや、一心に今ウキが沈むかどうかを眺めているのか---と思ったりした。そして一向に釣れないのをみていると、その真剣な姿が徒労の様に思えて、果してウキの下に魚がいるやどうかも分らず何遍となくウキを投げこんでいるのがあわれにもみえた。
茶の香りが腹の底まで渋くする様だった。思わず深い息をすい込んだ。茶の店はいくつもあったが、よくみると時代の変化がみられた。平等院とともに栄え、未だに何か格式というか古い慣習を思わせる店舗が、その店の同取や上品な和服に整装した年配の婦人などが、大きな古めかしい机の前に座ってりりしくしている姿をみるといかにも昔風だった。そうかと思うと、いわゆるスカッと新しく店舗をかまえウインドなんかを置いたりしたのをみると、あっみやげ物屋かと通り過してしまいそうな店もあった。これらが、たがいに軒を並べていた。しかし何処か普通の観光地のみやげ物屋と異る素朴さというか、京都の臭を感じた。当然といえば当然のことである。
万福寺で本堂の左右にある多数の和尚の像をみた、そして一度に同じ様な像を順にみて回っている内に、顔の表情によって、その人の性格というか、この人だったら寺をこんな風に納めるだろうなどと、こまかく想像する様になっていた。仏像をみる一つの目はこれかも知れないと思って、はっとした。そしてこれらの中心にある本尊の像を見上げたけれども、もはやこれらの像よりは何か高くとりすましている感じで、性格…云々は想像しようもなかった。
三宝院の庭をみようと門前に立った時、四時半前だった。あいにく遅いためみれない。仕方がないから山門を入って例の池を回り小さな滝の所へやってきた、もう暮色も濃い頃ではあったが、折からの夕焼けにあたかも紅葉がはえているかの様だった。もう紅葉も季節はずれではあったが、夕ばえの空がかすかに染ってこれがあたかもモミジのせいであるかの様な錯覚を起したのである。あたりは静かで水音が冷たく岩をたゝく音のみがひびいた。身動きしない水面を通して、底にモミジの落葉が重り合っているさまが、いかにも落ついた静けさを感じさせた。あたりに人影はみえなかった。
池の近くへ下りてきた、遠くからみるモミジの色は、あたかも冬の寒い頃に手などが紫色になるさまに似て一見寒そうな風景だった。

人出の盛りをすぎたモミジの姿がこの紫色に語っている様である。
山門を出て白壁のへいに沿ったゆるやかな坂道を降りながら，上をみると，すっかりと葉を落したこすえが暮れかけた空に寒々と手をのばしていた。
12月31日　　晴　　歩きはじめた頃知恩寺（百万辺）の最初の鐘の音を聞いた。人が沢山歩いている、暮れるという感じが一向にしない。早くこの場を離れて暮のムードの中に自分を没したく思った。
銀閣の疏水に沿う頃から，いくつもの鐘が聞え出した。余音に余音がかぶさる様である、これらの鐘の音は、それぞれ清楚な坊さんであったり、茶目ッ気たっぷりな小僧であったり、厳粛な老人であったりする。法然院，真如堂永観堂、南禅寺のものらしかった。疏水に映る水銀灯の光がこきざみに震えてみえるのも寒さのためだったかも知れない。歩いていく軒並も静かそのものではあったが、希望に満ちた暖かい息づかいが，さみしい静けさを感じさせなかった。
星あかりに黒々として大地にどっかりと座りこんだ南禅寺山門は，廻りの松の木の間を縫って響く鐘の音に、自分をもはじき出す様な厳粛な重みをみせた。知恩院へ向う頃から，おけら火を持った人達と出くわす、その花火線香の様にクルクル廻しながら闇の中から近づく様な、何とも童話的で気持がよい。知恩院のあのデッカイ鐘の回りには，黒山の人が見守っていたが、だれもが明るくその息づかいが耳に聞える様だった。
「えんやー，ひとーつ」「ごにーん」黒山の人は大きく息をはき出した。
清水の舞台からみる京都の街は，低くたれた霧の中に息づいて，1961年から1962年へと静かに動いて行く様だった。啄木の詩はたしかこんな人だったと思う，

じりじりと、ローソクのもえつきるごとく
夜のふけゆく大晦日かな。

「愛についての断章」

今，この断章をかくに当って、自分は今考えている事がこの人生に於いて，本当に正しいかどうか確信を得ていない，今春、自分は就職して社会へ巣立つ、その世界に於いて果して今の考えが通用するかどうか自分には不安である。しかし、少くとも今、素晴しいと思っているもののささやかな墓標を立てる意味で，これをかきたい。なるべく誠実にかくつもりではあるが何分古い日記を足どりにしたので、ラフな考えが随所にみられるだろう。ご了承願いたい。

〃蝉〃

夢をみた。持物を置いて自分の席に戻ってきてみると、自分の右側の席に見覚えのある紺色の袋がイスの上に置いてある。やがて「g」が入って来るのを感じたが，自分は何気ない振りをしている。だが「g」が席につくとき二人は微笑をかわす、その一見何気ない微笑の中に、相手の挙動を一つさえ見逃せまいとする目だけは、笑っていなかった。

やがて予定の会が始る。しばらくして気が付いてみると、いつのまにか自分が左の端に落ちるくらいに腰かけている。左へ動いたという記憶は全然ない。みると「g」が自分のすぐ横に居る。だが接している訳ではない。しかしその空間は、どちらか片方の力だけでは決して押しつぶされそうになかった。自分はこゝで何故避けなければならぬかと思う、するとたちまちその不自然さに堪え難くなって元に戻る。「g」の方は、押したつもりもないのに、ちゃんと席にいるからおかしい。やがて「g」が何か言った。何を言ったかよく分らない。自分は「しんどいんかい」と言ったら大きくかぶりを振った。その横顔は青ざめて、やつれ、大きなうつろな目をしていた。その目は自分を正視してはいなかったが、何物も恐れない目だった。自分はすぐ左腕を自分の肩にまわし室外へ連れ出す、他の人の目が一せいに感じられる。誰か「g」の右側についた同じ様に肩をかしていたが，いつのまにかいなくなっている。イスの上に一休みしていると「もう駄目——」と言った。自分は力づけようともせず無言でいる。医者にでも連れていくのかと思ったら，自分は「g」の家へ連れて帰ろうとするつもりである。何故か分らないが、この時自分の頭の中には「g」の母の姿が浮んだ。——

——森と田んぼにはさまれた道の上で、「g」は急に独りで帰るといい出す。自分は別にとめようともしない。そして田んぼの中を道と平行に走っている鉄道線路に沿って、近くの家に帰っていった。こゝで自分は今迄の状況を他の人達に話している。自分は「g」のことを心配だといった。他の人達の賛同も耳に入らないくらいである。

「g」の家に来た。自分はどうですかといった。初めて会う客の父が，自分のすべてを知ってでもいるかの様に対するのが不思議でもあり、一方身近かにある様で気軽く思う。父は畳をみつめながら静かにポツリポツリ思い出す様に語った。「g」はいつも何かにとりつかれた様な、一づに思いつめている様な風だったと言った。自分はこの時はじめて「g」の本当の心を知った様に思った。同時に「g」の悩みにくれている姿を目のあたりに見る様で胸が痛むのを覚えた。父は更に、いつかこんなことを言っていたといった。「勝ったつもりでいるけど，負けてはいないわ」と。しかし父にはこの意味は分らない

らしかった。自分は「負けたのは俺だ」と言いたかった。だが，この意味は，恐らく二人以外には分らなかっただろう。こうした父の態度に娘を心では心配しながらも，ジット暖かく見守っていたことが，自分にも感じられた。

―― 自分は相変らずそのまゝ座っていると，ガラス戸の向うを父が同年配の伴れと右から左へ横切っていく。伴れはしきりに何かをすゝめている，が父は一心に前をみつめて歩いていく。やがて左の戸の陰から父の姿が現れガラス戸の中に立ちどまる。「今度の件はきっぱりことわる」というのが聞えた。伴れは怒った様な，失望した様な顔付をして右へ消えた。――

――「g」が自分の腕の中で息をひきとろうとする。自分はこのまゝ死なせてはいけないと思った。するとあれほど言うに苦しんだ言葉がまるで何の抵抗もなく口をついて出た。「僕は君が好きだったんだ」と，「g」は，かすかに，しかしはっきりと「私も苦しいくらいに好きだった」と言った。

この時はじめて，近くの木で鳴いている蝉の声に気がついた。その声は今しがた腕台小槽の手から逃れた，晴れ晴れとした蝉の声だった。

〝恋は人生への関門〟（「出家とその弟子」より）

唯円：お師匠様，あの恋とはどの様なものでございましょうか．

親鸞：（まじめに）苦しいものだよ．

唯円：恋は罪の一つでございましょうか．

親鸞：罪にからまったものだ。この世では罪を作らずに恋をすることはできないのだ。

唯円：では恋をしてはいけませんね。

親鸞：いけなくてもだれも一生に一度は恋をするものだ。人間の一生の旅の途中にある関所の様なものだよ。その関所を越えると新しい光景が目の前に開けるのだ。この関所の越え方のいかんで多くの人の生涯は決まると言ってもいいくらいだ。

唯円：その様に重大なものですか。

親鸞：二つとない大切な生活材料だ。まじめにこの関所にぶつかれば人間は運命を知る。愛を知る，すべての知恵の芽が一時に目ざめる。魂はものの深い本質を見ることが出来る様になる，いたずらな，浮いた心でこの関所に向えば，人は盲目になり，ぐうたらになる。その関所の向こうの涼しい国をあくがれる力がなくなって関所のこちらで精力が尽きてへとへとになってしまうのだ。

唯円：では恋と信心は一致するものでございましょうか。

親鸞：恋は信心に入る通路だよ。人間の純な一筋な願いを突きつめて行けば皆宗教的意識に入り込むのだ。恋するとき人間の心は不思議に純になるのだ。人生の悲しみがわかるのだ。地上の運命に触れるのだ。
そこから信心は近いのだ。

唯円：では私は恋をしてもよろしいのですか.

親鸞：（ほゝえむ）　おまえの問い方は愛らしいな。私はよいとも悪いとも言わない。恋をするならするでよい。ただまじめに一筋にやれ。

何も言うことはない，全くうまく教えてくれている。自己に忠実に生きること、唯これだけのことに苦しみ、悩むのが恋であるかも知れない。だが，ただまじめに一筋にやれ，この言葉の中にすべてが縮少されている様に思うが……。

ところで、自分は何故今持っている様な世界観でなければならないかと思う。別に名誉を第一番目の生甲斐とし、富を得ることを目的とし，それについて満足な人生を送ったって良いじゃないか？　確かにそうだ。人はみなその人なりの人生を送れば良い。名誉を生甲斐としている人が名誉を得たら喜びを感ずるだろう。富を目的にしている人は富を得たら自分は幸福だと思うだろう。しかし、それで自分は人生をもっとも有意義に生きたと言えるだろうか。次のことを思う。

人生に対する満足及び喜びには色々種類がある。問題はその深さにあるのではなかろうか……。

〃蟬〃より

思うに「8」と自分は同一世界の人間であるか？　同一世界であると思う半面もあり、別の世界だと思う半面もある。そして第一の世界は多分に両者の感情の故に起ったのではあるまいか？　第二の世界は確かにある，

つまり自然の理として当然の，人間世界誰一人として完全に融合するものはない。やはり愛の中にも融け合わない一つの世界がある様に思う。それは性格の相異というか、つまりは「彼女が自分でないからだ」ということにつきる。人間すべて孤独である。だが今の自分は孤独であることを本当にさみしいとは思わない。　何故だろう。自分にはそれが少くとも自分の中にいる絶対者の為のみだとは言い切れない。自分には未だ恋とか愛とかいう字がある からだ。（つまりある対象によっていやされるさみしさである）

しかし、それをすぎた時，人生の本当のさみしさを知るのかも知れない。

終りに，分りもしないくせに人生という言葉を使いすぎた様に思う。しかし別の言葉で置きかえ様と思っても適当な言葉がみつからない。
だが，生きてやろうとする気持は変らない。　1962，1，25，

祇王寺

3回生　原　隼

私が歩いた道であなたが何を考えてもかまわない。
私が見付け出した美を私はたゞ理屈なしに紹介します。審美の理屈は私の日記にとゞめて、あなたには美の本質を……等とおっしゃらず、まずもうろうと感ずる所のものを素直に受けて、後に美的対象に駒を進めて審美のペンを振るって頂きたいのです。

久方ぶりに東京のいとこが訪ねて来たものだから嵯峨野の奥に足をふみ入れてみた。遊園堂の前を左に折れるともう京都も田舎の土臭がする。わら葺屋根の下に広い土間が見えて、その前を漸く登りになった道が孟宗の竿に敷きつめられ，しっぽりと足を踏ませてうらさびた生垣に浸み込んでいく。
「こゝより有料」の立て札までが妙にやぼったくぶらさげられておまけに「抹茶、説明、マンドラを聞かせて二十円」と薄板に半紙を貼って書きなぐってあるのに、うっそうと茂る紅葉、竹、楠等がそれから〝俗のあか〟をかき落していた。「祇王寺」こう書いてあるからこゝかと思う庵の庭に、妙齢の繊細な手がかすかにゆれて落葉が小山を作っている。
「入ってもいいですか。」「どうぞ。」それっきり。その白い手は休むこともない。頭の手拭いに紅葉もれの西日が落ちて一層白いその人の顔には全ゆる感情の打ち込まれた能面の微笑さえなかった。今は祇王祇女の桜だけが暗く葉を付けて、庵主の留守やの静寂が「立入お断り」の荒れ果てた庭から這い出した遣り水の音さえ吸い込んでしまっている。
その昔、京都に栄華を誇った入道相国清盛の股にはべった姉妹が、今は庵を中に桜と化して今昔の流れに何想う事かと尋ねる術もない。「この紅葉！
「そう、それは入道かも知れないね。二人があんなに意意がらに、おのが身につまされてでもいる様に。それでいて頑もしげに見守っているじゃないか。」　乙の権勢を多くの寺社に誇し、あまたの美女にかしずかれ、風流に装

いして平安京をへいげいしたこの紅葉は数を透く残照に乾一杯の供宴を催す。今オペラの舞台はクライマックスに達して観客もしばし拍手を忘れて静寂に浸っている。その舞台のセリから秋の陽が消えようとして入道ならずとも扇であおぎ呼びかえし度く思いながらも観客はまだ何も術をなさない。

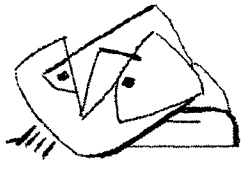
「ねえ、こゝの庵主さんじゃなくって？」「いゝや。」祇王寺の庵主さんは照葉さんと言って昔は遊里の人とか聞いている。祇園での指折りの美しい芸者とか。その人が何思ってか驚く粋人を後に一人尼となってこの庵を守る人となってもう幾年か。その心は知る由もない。あの華かな巷の内からこの奥嵯峨の平安の影を拾って移り住む人の心は、いちいち尋ねるには奥深い。

遊里と庵。その鮮かな対照はその奥の奥を極めてやがて合致する妙を知るには自分はあまりに無邪気である。私は今その無責任な傍観者にありながら、つい先年、友人を慰める歌を詠んだのを思い起す。

そひとげぬ人の扇の末広に
　　舞ふを恋ふると歌ふ君あわれ

おのが末知らずや君のコッポリに
　　長くしだれるその帯のごと。

友人とは言っても小学時代の二三年を共にした人でその頃から舞ひに通っていたのが，知らず、舞妓となって遊里にいたのが，その頃近くの大学生に恋するも遂げられなかったと小説を地でいったうつゝにも、高校生であった私は憤然やる方なく、同情に堪えなかったが、今思えば此も宿命的な契りかとふと愉しく、たゞ庵守る人の身にも当てゝ勝手な想いを馳せていたのだった。



素直な疑問

林　屋　慶　三

私達の研究室では、いま蚕の人工飼料の研究をしている。これは浜村教授のきわめて素朴な疑問，「蚕はなぜ桑だけしか食べないのだろう。」から始められた。以来十数年，食物選択の機構の究明から始まって今日の人工飼料作成の段階へと進んできた。

桑葉の冷アルコール浸出液に対して、蚕は敏感に感じて集ってくる。ところが集ってくるだけでこれを食べようとしない。桑葉の熱アルコール抽出液に対しては、蚕は集ってくると同時に、この液を含む寒天飼料をむさぼり食べようとする。　ところが、これも長続きしない。　寒天飼料にアルコール抽出残渣を更に入れてやると、初めて旺盛な食欲を示して、連続して飼料をたべ脱糞もする。

したがって、蚕が桑をたべるのは桑の中に三種の因子，誘引因子（Attractant）噛咬因子（Biting factor）、嚥下因子（Swallowing factor）が用意されているからと考えられる。　これら三種の因子の単離決定が次の課題である。数年の苦斗がみのって最近これらも決定された。

Attractant としてシトラール等テルペン系の数種の物質が、Biting factor としてβ-シトステロールというステロール類の一種、イソクエルシトリンというフラボン類の一種が，そしてSwallowing factorとしてセルロース，他にCofactorとしてシュクロース、イノシトール，燐酸塩、硅酸塩が，食性を支配するものとして分離決定された。

数千年来、桑以外の食物を知らなかった蚕も，今では私達の研究室で，上記の諸因子を加えた小麦粉や大豆の味を噛みしめて味わっている。　目下、栄養問題の解明へと更に研究を続けている。　良い蛋白であっても，嫌な香がすれば，蚕はこれを食べない。　消化吸収し得て、しかも忌避物質を含まない栄養源を探求しなければならない。　あるいは、蚕の成長促進因子を桑の中から更に単離しなければならないかも知れぬ。　前途にはなお、難問が山積している。

化学的に構造既知の純粋な物質のみで蚕が完全に飼育出来るようになれば、蚕の生理の研究はきわめて進展することとなろう。体内での物質の代謝、脱皮、変態、営繭等々、興味あるその機構の解明も容易になるにちがいな

い。　絹の生産という点から考えても，その夢は尽きない。　工場で毎日毎日生れでる蚕は、絹の生産を飛躍的に増大させるであろう。

夢は尽きず、今となれば仕事に夢中になってしまう。　しかし、たとえまだ夢にもせよ、こんな未来図を話してもみ、書いてもみる気になったのは、ごく最近になってからのことである。　それでは今まで、私達は何に支えられて日夜仕事をしてきたのであろうか。　それは、この仕事の初まりが、きわめて素直な、「なぜ蚕は桑だけを……。」　という疑問から始まっているからでなかろうか。　「蚕が桑のみを食べ、桑は蚕の飼料である。」　こんな単純なことに投げかけられた素直な疑問、これはきわめて貴重な疑問のように思える。　私は、先生のこの疑問に、今まで動かされつゞけてきたように思う。　恐ろしい力をもっているものである。

BUSHの中で

―伊豆旅行の思い出の一つ―

4回生　江　間　賢　治

第三日目、前日野宿したとき不注意からメガネの"わく"の片方を踏みつけてしまった。おかげでその日メガネは"わく"の一方がとれてしまい，落とさないように注意しながら歩く。これに加えて水筒に水を入れ忘れていたのである。

入間から吉田への道、途中道に迷う。bushの中をかきわけ進んで行くうちに、思わず顔を下に向け、メガネを落とす。bushは1mもの高さがあり、これを抜けて道を捜がすのに困まっていた矢先，この事件である。僕は足下を懸命になって捜してみたが、わからない。次第に興奮して頭に血が昇ってくる。早く捜さなければ！そう思うと，より一層興奮して自分が一体何を捜がしているのか、それすら忘れかける。ここで心を平常に戻すためその場に坐わり込む。　南国の太陽はこの間も容赦なく頭の上を照し続ける。暑くてたまらない。水がほしい。しかし水筒の中には一滴の水もない。道にまよって以来既に2時間を経ている。たまらない。しかしこの場を立ち去ることはできない。もう一度力をふりしぼってみる。どうもメガネという奴はやっかいなもので、かけなければ10m先きもはっきり見えないし、この様に落としてしまうと捜し出すのに往生する。　終まいには四っ這いになり、手と足とおぼつかない目、その三者を頼りにしてそこら辺を、片っぱしから動き回つ

てみる。何か足にあたった気がする。どうもbushのたぐいではないらしい。目的物であるかもしれない。そう一瞬思いながら後を振り返ってよく確かめてみる。メガネだ！　おもわず僕は一瞬安心感からその場にへたり込んでしまう。ここへ自分の苦労に報いてくれるために誰か一杯のビールでも飲ませてくれないか。ああ！　のどが乾いた。しかし水は依然としてない。仕方がないので立ちあがってリュックを手にとる。もう今度はメガネを落とさないようにポケットにしまい込んでおくことにする。周囲の情況を判断するために"片わく"だけのメガネであたりを見まわし、道に出る可能性のある方向を調べてみる。西に向って一直線に進んで行こう。そう決心する。

西に向って進む。リュックの重みが倍になったようだ。ファイト！こう叫びながらbushをつき破って進む。このbushはまるで生き物のように僕の体にからみつき進行をおくらせる。このbushとの戦いは約1時間続いた。やっとのことで道らしい道に出たとき，今度は猛烈に水がほしくなった。今や汗も出ない。体がひぼしになってしまったのかもしれない。ふらふらする体をやっとのことで支えながら，くもの巣だらけの道を下へ下へと降りて行く。

思想・隨想・幻想

2回生　金田洋二

はじめに

Chainに原稿を書こうと思うと、色々書きたいことがあって、あれや、これやと思いつゝ、ては書いてみるのだが，結局は、何も書けない。そこで，何回かに分けて連載し，自分の日常考えたり、本でよんだりしたことを，ぶちまけることにした。科学、宗教、恋愛，……「何んでも書いてやろう」である。　書く奴が書く奴だから，ろくなものは書けないだろうが，筆の続くかぎり書いていこうと思っている。

法則の類似について　　——自然の基本法則——

私達は、小学校以来、色々な自然科学の法則を学んで来ている。そして，一見して違った法則の中に、同じもの（本質的に又，形式的に）が見つかりはしなかったであろうか。

僕自身の貧しい経験では「Lenz の法則」と「ルシャトリエの法則」の類似があげられる。「Lenz の法則」というのは、承知のように、「誘導電流はそれに伴う磁界によって、磁界の変化をさまたげる方向に流れる」というものである。

自然というものは、確かに、加わる作用をさまたげる方向に、反応が進むものである。この意味に於て、「ルシャトリエの法則」は、自然界を支配する根元的なあるもの、自然の基本法則ともいうべき要素を持っているように思われるのである。

さらに、「万有引力の公式」と「クーロンの力の公式」が似ている（本質的には同一といってもいい）ことに気付いた人は多いだろう。僕はこのことが不思議でもあったし、引力と電磁気力というものの作用が似ていること等から両者の間により基本的な同一性があるだろうと思っていた。やがて、この両者の関係が、いわゆる「場の統一理論」であることを知った。

承知のように、この理論は、現在の物理学ではまだ解決されていない。けれども、この理論を否定する意見もなさそうである。ガモフは、「素粒子の性状が明らかになったとき、初めて判明するだろう[*1]」と、書いていたが、その素粒子の数が多くて、整理しているのが現状のようである。だから、ガモフの見解が、正しいとすれば、当分、解決する見込みもないようである。もちろん、問題が解決したとしても、私達に直接に　関係があるわけではないが、何か、人間の力が、自然の奥底に入っていくようで、たのもしく感じるのである。　（*「自然」1961・6月号　「重力」）

確率と法則と人間

私達は、今日に到るまで、多くの道むべき方向を、迷い、悩みながら、この大学の繊維化学科というコースに入って来ている。このことも、考えてみれば、不思議なもので、他に色々な道があったのにと思うことも、よくあるだろう。昔、ライプニッツは、このような人間の運命を、多くの存在可能な諸世界の中の最善のものとして、神に選ばれて出て来たものと解釈した。僕の生き方が、神によって選ばれたかどうか知らないが、とにかく、何らかの運命に左右されていることはわかる。だが、それを超自然的力のせいにする程僕は信仰が深くない。

この運命ということ、これを他の表現を用いるならば、確率と言えると思う。ある人の説によれば、都会の人間には、一日に、三百十いくつかの、危険がふりかかる可能性があるというが、人間には、明日死ぬ確率はいくらかはあり、財布を拾う確率も又、いくらかはあるのである。しかし、その確率

は、法則化するには、余りに複雑でありすぎる。

しかし，自然現象となると（厳密に言えば，人間生活も又自然現象かもしれないが，ここでは、無生物的なもの）例えば、ボルツマンによって、分る運動から、確率的な法則が見いだされた。当時は、人間は、自然界を支配するのは、必然的法則であり、確率的法則は、単に、人間の未知のことがらを、おぎなう必要から生じたにすぎないと考えていた。このような考えは、ラプラースによって代表される。彼は、「ある瞬間に於て、粒子の位置と速度と粒子間の相互作用を完全に知ることができる者にとつて、世界は、必然法則に従って進行するドラマである」といったが，このようなことは「相対性理論」や、ハイゼンベルグの「不確定性関係」によって、否定された。確かに、自然を巨視的にながめるとき、必然法則に導かれていると考えられるだろうが，微視的領域に於ては、もはや、必然法則では説明され得ない。ここで，微視的領域に於ても，巨視的領域に於ても、成り立ちうる法則として，確率法則が，現われてくるのである。そして，現在では，必然法則は，確率法則の一つの、特別な場合とみなされているのである。

このようにして，現在私達は、確率法則によって支配される自然観をもっているわけだが，これが絶対的に正しいという保証はあり得ない。私達が，人生の岐路に立って迷うように，そして絶対的なものを求めるように、自然感というものも又、絶対を求めながら、ある種の確率に支配されているのではなかろうか。

（この一文に多少ともの興味を示された方に，次の本をお読み下さい。
［自然］　1962．2月号　philip Morrison　「原因，偶然，創造」
［現代物理学の思想］　ハイゼンベルグ　みすず、ぶっくす）

秩序性から無秩序性へ　――一つの幻想的自然観――

現代物理学は、「統一場の理論」及び「素粒子の統一理論」が問題となっているように、無秩序なものからある秩序性を見い出そうとしている。そして，そのことは、昔からの自然科学の研究態度であった。

しかし現在、両理論ともいきづまっている。そして素粒子論について言えば，素粒子は現在３０種以上もあり、「坂田理論」や「ハイゼンベルグ－パウリの理論」のような統一理論があるが，いずれもまだ解決されたとは言えないようなものであるらしい。そのことについては、湯川博士が、坂田理論について「現在の量子力学の延長としての普通の場の理論では、理解できるものではなさそうである。」と述べておられる。(1)

このような事情を考えるとき、このような無秩序なものを秩序だてること

に誤りがあるのではないかと考えさせる。即ち、無秩序を無秩序として理解出来ぬかということである。さらに述べるなら、自然の究極的真理を無秩序と考えてみようというのである。そしてこれを基礎として、新しい自然像を築き上げようと試みてみるのである。

しかしながら、このような自然像を考えるには、余りに現実は美しく、又私自身常識的でありすぎる。そして、今日までの人類の成果は、余りに秩序に向いすぎているのを知る。シュレディンガーが述べるように[2]、秩序から秩序へと進むことはあっても、無秩序へ進むことはまずあるまいと思われる。けれども、そんな幻想をいだかせる程、現代の自然科学は複雑であり、難解なもののように思われるのである。そして同時に、現代科学は、量子論や相対論のようなコペルニクス的な新しい自然観を求めているのではないかという気がするのである。

(1)「現代科学と人間」　湯川秀樹　岩波書店

(2)「生命とは何か」　E・シュレディンガー　〃

絶対ということ

よく人は、自分の述べていることが、絶対的であるかのような話をする。もちろんその人は、そう信じているのだから、そのことについては文句をいうすじ合いのものではないかもしれぬが、絶対的に正しいと決める基準等どこにあるというのだろう。ラッセルは、自分の著書の始めに、「自分の述べることは正しいとは限らないが、ただ多少ともの共感を得たい。」といった意味のことを書いていたが、正にその通りだと思う。

かつて、ニュートンの力学は、絶対的であり、科学者を始めとして全ての人が、その絶対性を疑わなかった。しかしその絶対性も、時の力によっても多人も崩れ去った。そして、「相対論」や「量子論」が登場した。それでは絶対性は確立されたのか。否である。これらがいつ、ニュートン力学の運命をたどるか知れたものではない。現在の人間では、観測不可能な宇宙の領域、よりエネルギーの高い領域では何が起るのか全く予想もつきかねる。相対論の絶対性も単なるその適用領域にかぎっただけのことではないのかと考える。同じようなことはユークリッドの幾何学についても言えると思うのである。

こんなことを考えるとき、いつも真理の存在を疑うのである。「真理とは何か」入学式の後日、浜村先生が言われたが、今の僕には、真理は常にそれに近づき得ても、つかみ取ることのできぬ霞のように思えてならない。そして、永久にその内容を知覚出来ないのではないか等と考えたりする。そして、それでもなお、真理は求めねばならぬものであり、より近づかねばならないものであると考えている。そんな意味で、絶対は我々に最も遠くにあり、又

最も身近にあるものであると思うのである。"世間の人々は、科学の理論がいかに短命なものかを知って驚くのだ。" ――― アンリ・ポアンカレ

煙突の見える場所　――ある日電車の中で考えたこと――

私がまだ中学生だった頃、これと同名の映画があったような気がする。その映画に出てくる煙突と同じようなのが、学校へ行く電車の窓からながめられる。電車が走るにつれて、四本の煙突が、三本に見え、つづいて二本になり、ついには一本に見えたりする。もしある人が、「煙突は三本ある。」と言ったら、人はその人の不注意さを笑うだろう。けれど、その笑った人達も、他の方面では、結構その誤りを犯しているのではなかろうか。

例えば、ハンガリーの事件が起れば、ソ連は信じられないとか、スエズの問題では、英仏の帝国主義だと言ってさわぐ。もっと卑近な例では、日本にいるアメリカ軍のことについても言える。僕は、アメリカ軍が、日本の民主主義を築き上げてくれた解放軍のように敬って来た。そして今や、同じ人達によって、アメリカ軍は、帝国主義の反動政策の産物であるかのように言われる。アメリカが変ったのだろうか。そうじゃない、日本人の物の見方が変ったのである。そして、そのことは四本の煙突を三本や二本に見ることにも比すべきであろう。そして、三本の煙突が誤りであるように、アメリカ軍を解放軍と見ることも、帝国主義の産物とみることも又、誤りであろう。正にそれは電子に波動性と粒子性の二つの異る解釈が同時に必要であるのと同様に、アメリカを二つの見方の合せ備えた一つのものと解釈すべきなのではないか。同様のことが、ハンガリーの動乱にも言えるのではないのか。そしてこれらのことが、現在の問題ではなく、西洋の伝統的精神の表われであり、その意味において、丁史は正に場所を変えて見る電車なのである。

これらのことは、何も政治の問題だけなのではない、万物全て色々な見方をもっている多様体なのであり、人間をX線やXス使ってばかりでは解釈出来ないのと同様、その解釈は、ある主義、主張だけではすまされないものなのである。

そのような意味で、四本の煙突は、我々に多くのことを示してくれているような気がしたのである。」

卒業にあたって

4回生　近藤孝一

入学後四年間というものが、終ろうとしている。私はこの期間、何を教えられ、何を学んだか、心というものがあるならば、それが如何なる影響を受け、又変化したか。結局、自分が、この大学生活により確立した現在の心身がはたして、意義のあるものと言えるか。

行動の面よりみれば、確かに変化している。法律の保護(?)の下で、飲酒、喫煙する事もできるし、その他諸々の所に、出入する事もできる。しかしこれは何も大学生だけがする事ではないから、もし私が中学ないし高校でそのまま卒業しておれば、もっと早く行なう事ができるかもしれない。故に精神面を主体に考察を加えねばならないと思う。

入学後、学問時に繊維化学に関する色々な知識を与えられ、その面白さを少なからず感じ、我がこの方面に進む事の出来た事を感謝しています。又現在まで、無数の人間が参加して各自が、その持てる力をもってあの神秘な自然に立入り、物事を究明し、その秩序を見出し、人間社会へ反射させた、あの科学の一分野に加わる事ができるかもしれないという事に、期待を寄せています。しかしあの偉大な山、科学という山に登る資格が自分にあるのかどか、その能力が充分なのか。私はこれに対して確答できない事を残念に思います。即ち、大学四年間を通じて、未だ、自分に対して、信頼を置く事が出来ず、自分が仕事をするには、はなはだ不安定だからです。大学生活を通じて、色々人の考え方も聞き、自分も考えて、人生感とかいう物を、作った積りでいますが、これが自分の心と全く一致し、その人生感に従って生活しているとは、ウソでも言い難い。

結局、この中途半端な段階に位置する私を、より確実にするには、より大きな社会を見聞し、その内に進入する必要性を感じます。自分をあらゆる困難な場に立たせて、その時の自分の心を充分吟味してみたいという様な気がします。そして序々に先人達が残していってくれた、科学に親しみ、未知の世界の味を知りたい。科学を楽しむ為には、まず自分を知り、知識を得、それらが融合しなければと思う。

科学に楽しみ、しかも象生活度する事ができる。この様な気持で、仕事する事。私は就職に当って、斯様に感じています。繊化生の中で、科学史を重要視し、しかも現代を認識し、真に科学に楽しみを見出される様な人が多く排出される事を期待いたします。

過去・未来・現在

4回生　江　間　賢　治

自分が現在生存しているこの時代に生まれあわせたことに非常に喜ろこびを感じている。20世紀という時代は確かに変化多い時代である。もし仮りに200年前同じこの日本社会に生まれてきたと考えると、どうであろうか。我々は封建社会というわくの中で殆んど社会の移り変わりなど見ることもなく一生を終えてしまわなければならなかったであろう。しかし現在既に過去50年の間に二つの世界戦争を経験し、今資本主義と共産主義との対立の中に生活している自己を見出すとき、毎日刻々に変りゆく世界の情勢に注意を向けざるを得なくなる。20年後我々の社会は如何なる変化をなすであろうか？はなはだ興味ある問題である。ここで問題を同じく20年前の世界に向けてみよう。

1933年ドイツにファシズム政権ができたとき世界は暗い暗黒のきざしがさしてきた。西欧の列強は増大する共産主義の脅威に対抗するため、これを支持する政策をとった。それ以来次々にファシズムは全ヨーロッパに浸透していき、イギリス，アメリカにおいてさえファッシズム的な傾向が生じてきた。世界は反共という共通の理念に向って進む。しかしこのときドイツとフランス、イギリスとの間に決定的な割れ目を生ぜさせる事件がおきた。これはドイツとソ連の間に成った独ソ不可侵条約である。この条約によりドイツは両面作戦の脅威が去って全ヨーロッパを支配することができたが，ヒトラーの初期の目的，イギリスと協同してソ連を打倒するという機会を失ってしまった。それからあの独ソ戦争が始まるのである。この当時一体誰が現在のような世界情勢になると思った人があるだろうか？

今後20年の間にこの様な大きな変化が起こらないとは誰も断言することはできない。将来共産主義が一夜のうちに滅び去ってしまうかもわからないし、また資本主義が何等かの事件でこの地上より姿を消してしまわないともかぎらない。我々がこのような変化多き時代に生きた者として世界の動きに目を向けざるを得なくなる。

昭和36年度卒業生のゆくえ

荒瀬	治夫	三菱製紙	真多	勇夫	大日本紡績
荒谷	善夫	東洋レーヨン	三辻	勝	関西ペイント
江間	賢治	三井化学	三宅	佳代子	倉敷レイヨン
早川	和彦	日産化学	宮内	博一	住友電工
中村	稔	山陽パルプ	名取	和信	帝国人絹
藤田	清志	東邦レーヨン	西久保	敏規	鐘淵紡績
市原	治郎	日本レーヨン	岡崎	謙	京大大学院
市村	晃	東洋レーヨン	佐野	元彦	積水化学
海野	悟	倉敷紡績	笹倉	忠雄	日東紡績
柏木	克之	丸善石油	佐藤	京子	京大大学院
片山	好彦	旭化成	竹田	敬司	京大大学院
川端	宗成	丸紅飯田	富岡	亨	新日本窒素
川崎	元夫	京大大学院	桑山	文俊	丸善石油
木田	文夫	東洋紡績	上野	建二	京大大学院
木下	三郎	日本油脂	鵜飼	哲雄	東洋紡績
岸田	寛治	呉羽紡績	内河	良彦	日東紡績
小林	利弘	三菱レイヨン	山元	一正	京大大学院
小原	弘道	倉敷レイヨン	山名	貞夫	日本ミネソタ3M
近藤	孝一	武田薬品	吉井	謝二	呉羽化成
近藤	正昭	東洋レーヨン	蕭	始達	東工大大学院
国本	昭弘	宇部興産	呉木	和夫	東亜紡織

編集部紹介

4回生	荒瀬 治夫	2回生	有松	利雄
	荒谷 善夫		金井	政洋
	早川 和彦		樋本	勲
3回生	木下 泰忠		堀江	宏
	沢野 敏実	1回生	井上	隆之
			川村	了一

編集後記

昭和三十七年を迎え、いよいよ本年度も余すところわずかになった。こういう時Chainも第十号発行成りました。
四回生には本号が最後になりますが、その意味でも四回生諸子の原稿がかなり集まり、今後のChainの発展を暗示したことになると期待されます。
なお今後も卒業後の様子をお知らせ下されば幸いと思います。
又後輩のためにも次号では住所を載せたいと思いますので、編集部または荒谷までお知らせ下さい。
では今後の四回生諸子の御健闘をお祈り致します。

表紙は前号に続き高橋紘氏の案を採用しました、こゝにお礼を申し上げます。

Chain No.10

発行日	昭和37年2月7日
発行者	京都工芸繊維大学繊維化学科学生
印刷	北斗プリント社 TEL⑦0231
編集	繊維化学科Chain編集部
編集代表	金井政洋